

第3部 調査結果の分析・解説

第3部 調査結果の分析・解説

1. 自己肯定感と社会生活の実態

中央大学文学部教授 古賀 正義

1 自己肯定感の尺度構成とその意味内容

国や地方自治体が子どもの社会生活の実態を継続的に測定・評価していく「インデックスボード」の考え方において、重要な一つの要素となるのは、子どもが自分自身のことをどのように評価し、どれほどポジティブな姿勢に立ってきているのかを検討する「自己肯定感」の把握である。当然そこには、親や友人、先生など他者からみた自分自身の評価も含まれ、社会に役立つ存在としての「自己効用感」の要素も入ってくるといえよう。

本調査では、今の自分が好きだ、自分は親（保護者）から愛されていると思う、うまくいくかわからないことにもがんばって取り組む、自分は役に立たないと強く感じる（＝否定的な設問であるので、反転して得点化）という4つの設問を設定し、4件法（そう思う4点、どちらかといえばそう思う3点、どちらかといえばそう思わない2点、そう思わない1点の4つの選択肢）の回答を求め、その合計得点から「自己肯定感尺度」を構成してみることにした。

以下の図表1にあるように、合計点が最も高い16、15点グループを高得点グループ（Aグループと表記）とし、以下4分位の回答者数に沿って、中得点のグループ（B、Cグループ）、低得点グループ（Dグループ、0点の無回答者を含む）を構成した。

Aグループが27.4%と高い比率を占めるのに対して、Dグループは12.7%と低い比率になっている。なお、以降は、アルファベットでグループを表記する。

図表1 自己肯定感グループの構成

グループ	合計点	回答者数（人）	全体の構成比
A	16	256	27.4
	15	272	
B	14	315	34.0
	13	340	
C	12	297	25.9
	11	202	
D	10	114	12.7
	9	65	
	8	30	
	7	16	
	6	9	
	5	6	
	0	4	
総計		1,926	100.0

この4グループについて、自己肯定感の高低による居場所認識や困難の対処方法、社会参加、将来展望などの違いについて分析を加えていく。まず、属性の要素を確認しておく、年齢構成からは高得点層に中学生がやや少なく、低得点層にやや多くなっている(図表2)。特に、15歳という高校受験などもある中学3年生を主とした年齢層で、自己肯定感の低得点層に2割強もの者が存在していることには注目しておきたい。

図表2 自己肯定感グループ別年齢構成

(%)

		全体 (人)	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	平均 (歳)
全 体		1,926	14.0	17.3	16.2	16.6	17.6	18.3	12.6
自 己 肯 定 感	A高得点グループ	528	17.2	19.1	18.2	13.6	15.9	15.9	12.4
	B中上グループ	655	14.5	18.9	15.4	15.3	16.3	19.5	12.6
	C中下グループ	499	11.4	15.8	14.8	20.4	20.4	17.0	12.7
	D低得点グループ	244	10.7	12.3	16.8	18.4	18.9	23.0	12.9

ちなみに、データは省略するが、2世帯・3世帯同居など世帯構成の影響はほとんどなく、単身家庭世帯やきょうだいなし世帯による影響も少ない。

属性の影響が少ない一方で、自己肯定感の高低は、いま幸せである感覚にはっきりと通じているといえる。「今、自分が幸せだと思うか」をたずねた結果をみると、図表3にあるように、高得点グループで「そう思う」が92.6%にも及んでいる。他方、Dグループでは、20.9%と極端な差がある。「どちらかといえばそう思う」の割合を合算しても、Aグループ98.7%>Dグループ73.0%と、25ポイント近い開きがある。より前向きな自己肯定感を生み出す背景には、こうした幸福感覚の保持や、以下でみる多くの居場所の存在、孤立感のない他者との親密さなど、自分を取り巻く社会関係の豊かさが感じ取られている必要があると推察される。自己の効用感という言葉もあるように、ただ単に、自己の内側で肯定的に評価できるというより、むしろ良好な社会的な関係性の保持の結果として自己の評価が高まっていると考えられる。

図表3 自己肯定感グループ別「今、自分が幸せだと思いますか」の結果

(%)

		全体 (人)	そう思う	どちらか といえば、 そう思う	どちらか といえば、 そう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう思わ ない(計)
全 体		1,926	64.5	29.1	4.8	1.1	0.6	93.6	5.9
自 己 肯 定 感	A高得点グループ	528	92.6	6.1	0.6	0.2	0.6	98.7	0.8
	B中上グループ	655	74.0	23.4	1.5	0.5	0.6	97.4	2.0
	C中下グループ	499	43.5	49.7	5.4	1.0	0.4	93.2	6.4
	D低得点グループ	244	20.9	52.0	21.3	4.9	0.8	73.0	26.2

次に、5つの場所（自分の部屋、家庭、学校、地域、インターネット空間）について居場所と感じているかをたずね得点化した結果を見てみることにしよう（図表4）。

Aグループは、ほぼ半数（48.5%）が「5つ居場所になっている」と回答している。これに反して、Dグループでは、居場所の数は極端に少なくはないものの、「3つ居場所になっている」が最も割合が高く、31.1%になっている。多様な居場所の存在は、自己肯定感とも関連しているとみられる結果である。しかしながら、付言しておけば、自己肯定感グループ別で居場所の多少の影響があまりないのは、「インターネット空間」であった。ここでは、自己の現れ方が他の場と異なっているのかもしれない。

図表4 自己肯定感グループ別居場所の数

(%)

		全体 (人)	1つ 居場所に なっている	2つ 居場所に なっている	3つ 居場所に なっている	4つ 居場所に なっている	5つ 居場所に なっている	いずれも居 場所になっ ていない (計)	無回答
全 体		1,926	1.7	7.3	18.8	26.3	39.4	0.3	6.2
自 己 コ 肯 定 感	A高得点グループ	528	0.6	4.4	11.7	28.6	48.5	0.4	5.9
	B中上グループ	655	1.2	5.3	18.6	24.3	44.1	0.3	6.1
	C中下グループ	499	2.0	9.6	20.6	27.5	35.1	-	5.2
	D低得点グループ	244	4.9	13.9	31.1	24.2	16.0	0.8	9.0

こうみれば、ここでの自己肯定感の高さには他者との関係性の良さから生み出されるものが少ない。実際、孤独感にかかわる5項目（さみしいと感じることが多い、ひとりぼっちだと感じる、周りから取り残されていると感じる、困ったときに誰も助けてくれない、自分には話せる人がいない）を上記の方法と同様に得点化してみると、ここでも、自己肯定感が高い層は、きわめて明瞭に、孤立感・孤独感得点が低くなっている（図表5）。具体的には、得点5点の最も孤独を感じていないとする回答の結果で見れば、Aグループ71.6% > Dグループ14.8%と大きな差がついている。豊かな孤立していない社会関係の存在は、小中学生の自己肯定感を高めるとみることができる。

図表5 自己肯定感グループ別孤独感スコア

(%)

		全体 (人)	5点	6点	7点	8点	9点	10点	11点	12点	13点	14点	15点	16点	17点	18点	19点	20点
全 体		1,926	42.3	11.2	8.8	6.6	4.9	8.9	4.8	3.1	1.7	1.8	1.6	0.7	0.8	0.5	0.3	0.3
自 己 コ 肯 定 感	A高得点グループ	528	71.6	11.7	5.9	2.8	1.1	3.2	0.8	0.6	0.6	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	B中上グループ	655	42.6	14.0	11.9	8.7	3.5	7.3	4.4	2.7	0.9	0.8	0.9	0.5	0.3	0.2	0.0	0.3
	C中下グループ	499	24.4	11.2	9.2	8.2	9.0	16.4	6.8	3.2	2.8	2.4	2.0	0.6	0.8	0.6	0.0	0.2
	D低得点グループ	244	14.8	2.5	6.1	5.7	8.2	9.8	10.7	9.4	3.7	6.1	6.1	2.9	3.7	2.5	2.5	1.2

注) 図表中、孤独点スコア0～4点の表記は省略。

2 落ち込み経験と回復の方法

自分自身に対する肯定感が他者とのよりよい関係性を必要とするすれば、翻って、自分自身を襲ってくるいやな体験や困った経験の感覚も何らかの援助をしてくれる他者との関係を介して改善していくことが予想される。実際調査結果ではどうか。図表6は、「今までに、ものごとがうまくいかず落ち込んだ経験があったかどうか」をたずねた結果について、自己肯定感別に割合を示したものである。

図表6 自己肯定感グループ別落ち込んだ経験

		全体 (人)	あった	どちらかといえ ばあった	どちらかといえ ばなかった	なかった	わから ない、答えら れない	無回答	ものごとが うまくいか ず落ち込 んだ経験が あった (計)	ものごとが うまくいか ず落ち込 んだ経験はな かった (計)
全 体		1,926	42.5	22.5	14.5	11.9	6.2	2.3	65.0	26.4
自 己 肯 定 感	A高得点グループ	528	37.7	22.0	15.3	17.6	5.3	2.1	59.7	33.0
	B中上グループ	655	41.8	23.5	15.4	10.4	6.3	2.6	65.3	25.8
	C中下グループ	499	41.3	24.4	16.6	10.2	5.4	2.0	65.7	26.9
	D低得点グループ	244	57.0	17.2	5.7	7.4	9.8	2.9	74.2	13.1

この結果をみると、「落ち込んだ経験があった」「どちらかといえばあった」を合わせた割合で、Aグループが6割ほどであるのに対して、Dグループは7割強と非常に高い割合となっている。心理的にリスクのある困りごとの経験が、自己肯定感の低い層にはより多いといえる。

しかしながら、一層注目したいのは「ものごとがうまくいかず落ち込んだ状態が元にもどった経験があるかどうか」に関する回答である(図表7)。前問で、「落ち込んだ経験あり」とした人へのみ回答を求めている。ここでも「元に戻った経験があった」(「あった」、「どちらかといえばあった」を合わせた結果)という回答の割合をみると、Aグループが9割を超えて回復したと回答しているのに対して、Dグループは8割弱しか回復したとは回答してなく、差が大きい。Dグループの自己肯定感が低いグループは、落ち込んだ経験をしやすいうえに、元に戻すことができない場合が多々あることになる(割合を計算すると、Dグループの5人に一人程度が回復できていないことになる)。いいかえれば、この層は困難体験ばかりでなくリカバリーにも難しさを抱えているといえる。

図表7 自己肯定感グループ別元に戻った経験

(%)

		全体 (人)	あった	どちらかといえ ばあった	どちらかといえ ばなかった	なかった	わからな い、答えら れない	無回答	ものごと がうまくい かず落ち込 んだ状態が 元にもどっ た経験があ った(計)	ものごと がうまくい かず落ち込 んだ状態が 元にもどっ た経験はな かった (計)
全 体		1,252	67.4	22.0	3.7	2.1	4.3	0.5	89.5	5.8
自 己 コ ア 定 感	A 高得点グループ	315	82.5	10.8	1.9	1.6	2.2	1.0	93.3	3.5
	B 中上グループ	428	72.7	20.6	2.1	1.9	2.6	0.2	93.2	4.0
	C 中下グループ	328	59.8	28.0	3.7	2.7	5.8	-	87.8	6.4
	D 低得点グループ	181	42.5	34.3	10.5	2.2	9.4	1.1	76.8	12.7

それならば、落ち込んだ状態を元に戻す回復のきっかけの選択については、自己肯定感の高低が関係しているのであろうか。図表8の結果に限ってみれば、Aグループが自分の努力はもとより、家族や友人、先生など他者からの援助によっても回復を進めているのに対して、Dグループが時間の経過によってやり過ごすという対処的な方法をとりがちであることがわかり、重要な知見である。

具体的には、自己肯定感が高いAグループでは、「家族や親せきの助け」が6割強、「友だちの助け」が6割、「自分の努力で乗り越えた」が5割強と、いずれも高い割合である。これに対して、自己肯定感が低いDグループでは、「友だちの助け」が5割弱、「家族や親せきの助け」が3割5分、「自分の努力で乗り越えた」が3割弱、といずれも低い割合になっていて、「時間がたって状況が変化したこと」4割弱がむしろ高い割合となる。自己肯定感の高低で、家族や友人といった身近な他者からの伴走的な援助の感覚に大きな違いがあるといえる結果である。

ただし、唯一割合が高くありながら「学校の先生の助け」については、Aグループ2割強>Dグループ2割弱と拮抗している。加えて、公的機関や専門家、地域の人などは、両グループともに限られた割合となっている。専門性のある人や場あるいは大人世代を、落ち込みの回避に有効に活用することは難しいのかもしれない。

図表8 落ち込みのリカバリー方法

(%)

		家族や親せきの助け	友だちの助け	学校の先生の助け	スクールカウンセラーなど	地域の人の助け	相談した場所に行つて	病院や相談場所に行つて	相談したこと	電話やインターネットで	した人に話してみたいかなかつた経験を	同じようにうまくいかなかつた経験を	趣味の活動に参加したこと	時間がたつて状況が変化したこと	あつてまわりの環境が変わつたことが	引越しまわりの環境が変わつたことが	自分の努力で乗りこえたこと	その他	わからない答えられない	無回答
全体	全体 (人)	1,120	52.7	56.1	23.2	2.5	1.0	1.7	2.4	7.6	15.1	38.8	2.9	41.3	5.8	3.9	0.3			
自己肯定感	A 高得点グループ	294	62.9	59.5	23.5	1.0	1.4	-	0.7	9.2	16.0	39.1	3.1	51.7	3.7	2.0	-			
	B 中上グループ	399	56.9	58.9	24.8	1.8	0.3	2.3	2.5	6.5	13.5	38.3	2.0	42.1	5.5	3.3	0.3			
	C 中下グループ	288	44.8	53.1	23.3	3.8	1.7	2.1	2.8	6.3	14.9	39.2	3.5	36.5	6.3	4.5	0.7			
	D 低得点グループ	139	35.3	46.8	18.0	5.0	0.7	2.9	5.0	10.1	18.0	38.1	3.6	26.6	10.1	8.6	-			

そこで、子どものかわるいろいろな場で「何でも相談できる人」がいるかをみてみよう。家族や親せき、学校で出会った友だち、地域の人（近所の人、塾や習い事での友だちなど）、インターネット上における人やグループの4つの項目について、4件法でたずねているので、これまでと同様に得点化してみた。

得点が高いものから4分位のグループに分けているので、最も相談できている層・Aランクが430名（23.5%）、次いでかなりできている層・Bランク504名（27.5%）、まあまあできている層・Cランク571名（31.2%）となり、相談できにくい層・Dランクは325名（17.8%）にとどまる。これに自己肯定感のスコアを組み合わせしてみた（図表9）。

相談できている層では自己肯定感のAグループが45.4%と約半数もいるのに比して、相談できていない層では、11.7%と10人に一人程度しかいない。相談できる人や場を持っていることが、援助してもらえ可能性への信頼を強め、自分自身のあり方を肯定させていくとみえる結果である。

図表9 相談ランク と 自己肯定感スコア(点) のクロス表

		自己肯定感スコア(点)													
		全体 (上段:人)	0	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
スコアランク		D				C				B			A		
全 体		1,830	4	6	9	12	28	61	107	196	283	330	288	260	246
		100.0%	0.2%	0.3%	0.5%	0.7%	1.5%	3.3%	5.8%	10.7%	15.5%	18.0%	15.7%	14.2%	13.4%
相 談 ラ ン ク	A 高得点グループ	430	1	1	0	1	3	7	18	23	42	78	61	89	106
		100.0%	0.2%	0.2%	0.0%	0.2%	0.7%	1.6%	4.2%	5.3%	9.8%	18.1%	14.2%	20.7%	24.7%
	B 中上グループ	504	0	0	2	1	8	10	16	52	74	90	99	84	68
		100.0%	0.0%	0.0%	0.4%	0.2%	1.6%	2.0%	3.2%	10.3%	14.7%	17.9%	19.6%	16.7%	13.5%
	C 中下グループ	571	2	1	2	4	5	20	29	71	107	117	92	60	61
		100.0%	0.4%	0.2%	0.4%	0.7%	0.9%	3.5%	5.1%	12.4%	18.7%	20.5%	16.1%	10.5%	10.7%
	D 低得点グループ	325	1	4	5	6	12	24	44	50	60	45	36	27	11
		100.0%	0.3%	1.2%	1.5%	1.8%	3.7%	7.4%	13.5%	15.4%	18.5%	13.8%	11.1%	8.3%	3.4%

この結果に代表されるように、自己肯定感の高い層では、家族や親せき、学校で出会った友だち、地域の人（近所の人、塾や習い事での友だちなど）のどれでも、「困ったときは助けてくれる」「本音を話せることがある」の項目でも非常に高い割合になっている。すでに論じたように、いろいろな周囲の他者とのコミュニケーションの回路が保証されていることは、排除されることなく社会生活を、自信をもっておくれる源泉なのだろう。他方で、自己肯定感の低い層では、他者との絆が揺らいであり、自分自身への自信も損なわれていく可能性がある。ただし、ここでも「インターネット上における人やグループ友人」では、特に「本音を話せることがある」（図表10）などで自己肯定感ランクによる割合の差がほとんどなく、ネット世界の自己像についての検討が今後必要であると思われる、興味深い。

図表10 自己肯定感グループ別、インターネット上における人やグループ友人では、

「本音を話せることがある」の結果

(%)

		全体 (人)	そう思う	どちらかといえ ば、そう思う	どちらかといえ ば、そう思わな い	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう思わな い(計)
全 体		1,926	8.5	9.0	12.4	65.4	4.7	17.5	77.7
自 己 肯 定 感	A 高得点グループ	528	9.7	5.3	8.1	72.9	4.0	15.0	81.1
	B 中上グループ	655	6.4	8.1	12.4	67.3	5.8	14.5	79.7
	C 中下グループ	499	7.8	11.2	16.0	61.5	3.4	19.0	77.6
	D 低得点グループ	244	13.1	15.2	13.9	51.6	6.1	28.3	65.6

繰り返しになるが、例えば「誰とでも仲良くなれる」といった他者とのコミュニケーションへの自信が自己肯定感の高低とつながっていることの意味は大きい(図表11)。社会学で多くの相互作用論者が指摘してきたように、自己への評価は他者のレスを介して実感できるといえる結果である。

図表11 自己肯定感グループ別、「誰とでも仲良くなれる」の結果

(%)

		全体 (人)	そう思う	どちらか といえば、 そう思う	どちらか といえば、 そう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう思わ ない(計)
全 体		1,926	32.0	38.5	21.1	7.8	0.6	70.5	28.9
自 己 肯 定 感	A 高得点グループ	528	52.8	33.7	11.4	1.9	0.2	86.6	13.3
	B 中上グループ	655	32.2	43.2	19.7	4.6	0.3	75.4	24.3
	C 中下グループ	499	18.8	42.1	29.1	10.0	-	60.9	39.1
	D 低得点グループ	244	13.1	29.1	29.9	24.6	3.3	42.2	54.5

3 支援のあり方と社会参加の実際、将来への展望

ならば、家庭や学校以外で、小中学生である対象者は、悩みやこまりごとなどを相談できる場所があることを知っているのだろうか。自己肯定感の高低は影響するか。

図表 12 にあるように、相談機関の認知度には際立った差はないが、やや自己肯定感が高いグループに知っている割合が高いといえる。

図表12 自己肯定感グループ別、相談機関の認知度

(%)

		全体 (人)	知っている	知らない	無回答
全 体		1,926	70.0	29.0	0.9
自 己 肯 定 感	A 高得点グループ	528	76.5	22.9	0.6
	B 中上グループ	655	72.8	26.9	0.3
	C 中下グループ	499	63.1	35.5	1.4
	D 低得点グループ	244	62.7	34.8	2.5

しかし、図表 13 にあるように、どういった人なら困ったときに相談したり助けてもらったりしやすいかをたずねると、自己肯定感グループによって大きな違いがある。

自己肯定感が高いグループは、身近な他者である、家族・親せきや学校の友だちが 8 割以上、学校の先生も 5 割弱と高く、地域の友だちも 2 割ほどいる。自分自身の周りに相談援助できる人がたくさんいる感覚である。一方、自己肯定感が低いグループは、身近な他者の割合が軒並み低くなっている。家族・親せきが 5 割弱（マイナス約 40 ポイント）、学校の友だちが 5 割（マイナス約 30 ポイント）、学校の先生が 2 割（マイナス約 30 ポイント）となっている。同時に、「同じように落ち込んだ経験をした人たち」が相対的に高い割合となり、ここでも「被傷体験・出来事」の重さを感じさせる結果となっている。

図表13 自己肯定感グループ別、ものごとがうまくいかず落ち込んだときに、
どういった人なら、相談したり、助けてもらったりしやすいか

(%)

		全体 (人)	家族 や親 せき	学 校の 友だ ち	地 域の 友だ ち	先 輩 や 後 輩	学 校の 先 生	学 校に いる 専 門 家 ス ク ー ル カ ウ ン セ ラ ー な ど	地 域 の 人	(学 校 以 外 の 専 門 家)	病 院 や 相 談 場 所 な ど に い る 専 門 家	し た 人 た ち	同 じ よ う に 落 ち 込 ん だ 経 験 を	そ の 他	し よ う と 思 わ な い	誰 に も 相 談 し た り	わ か ら な い	無 回 答	と 思 う 人 が い る (計)	相 談 し た り 助 け て ら っ た り し よ う
全 体		1,926	76.9	74.5	14.3	13.4	37.7	8.8	2.6	5.7	15.1	2.1	3.2	3.5	0.7	92.6				
自 己 肯 定 感	A 高得点グループ	528	88.8	83.1	20.5	17.6	47.0	10.0	5.3	6.3	15.3	1.9	1.5	0.6	0.6	97.3				
	B 中上グループ	655	82.4	81.5	13.9	15.3	40.5	8.7	2.3	6.1	15.9	2.1	1.5	1.7	0.3	96.5				
	C 中下グループ	499	70.7	66.5	10.2	10.4	33.1	8.2	1.2	5.2	13.8	1.4	3.8	5.0	1.0	90.2				
	D 低得点グループ	244	48.8	52.9	10.7	5.7	20.1	7.8	0.8	4.5	15.2	3.7	9.8	11.5	1.6	77.0				

さらに、図表 14 にある社会参加の活動、だれかと一緒に参加する活動でも、やはり対人関係の資源の差異に影響があるのか、大きな差のある項目が多くなる。

「映画、展覧会をみたり、音楽をきいたりする」「スポーツをする・スポーツの試合をみる」「自然体験（キャンプ、川遊び、星の観察など）」など、集団での活動を伴うものほど自己肯定感グループ間の開きが大きくなり、「地域行事（祭りなど）」「地域活動（公園清掃、子ども会活動、防災訓練など）」などの社会貢献的な活動でも差が認められる。これに比して、「学校の宿題や塾の課題などの勉強を手伝ってもらう」「絵をかく・音楽などを作ったり演奏したりする」といった個人での活動で、やや差が少ないといえよう。

図表 14 自己肯定感別、社会参加の活動

(%)

		映画 展覧会を みたり 音楽を きいたり する	絵を かく・ 音楽 など を作 った り 演 奏 し た り す る	ス ポ ー ツ を す る ・ ス ポ ー ツ の 試 合 を み る	（ キ ャ ン プ 川 遊 び 星 の 観 察 な ど ）	自 然 体 験 （ 外 国 人 と 仲 良 く す る ホ ー ム ス テ イ な ど ）	国 際 交 流 （ 旅 行 に 行 く ）	旅 行 に 行 く	勉 学 校 の 宿 題 や 塾 の 課 題 な ど の	学 校 の 宿 題 や 塾 の 課 題 な ど の	習 い 事 を す る	ポ ラ ン テ ィ ア （ 老 人 ホ ー ム に 行 く な ど ）	地 域 行 事 （ 祭 り な ど ）	（ 地 域 活 動 公 園 清 掃 子 ど も 会 活 動 防 災 訓 練 な ど ）	あ て は ま る も の は な い	無 回 答	思 う も の が あ る （ 計 ）	こ の 中 に が あ る 誰 か と 一 緒 に 参 加 し た い と
全 体		1,926	65.7	29.4	51.6	50.1	16.7	63.9	30.0	30.3	11.5	40.2	14.5	6.2	1.1	92.6		
自 己 肯 定 感	A 高得点グループ	528	70.3	34.5	63.6	59.7	22.2	72.2	34.1	41.7	15.7	49.4	21.0	1.5	0.8	97.7		
	B 中上グループ	655	68.7	27.6	53.6	53.7	17.4	66.1	30.8	29.0	11.5	41.2	14.7	4.9	0.8	94.4		
	C 中下グループ	499	62.9	26.9	43.9	42.3	13.2	58.3	26.5	25.3	9.2	33.7	10.2	8.2	1.4	90.4		
	D 低得点グループ	244	53.7	28.3	35.7	35.7	9.8	51.2	26.2	19.3	7.4	31.1	9.0	16.0	2.5	81.6		

最後に、「社会に役立ちたい」とか「将来に希望がある」といった子どもたちの未来への展望も聞いているが、ここでも自己肯定感が低い子どもたちの社会への参加参画の意識は低くなってしまっている（図表 15、図表 16）。日常的な他者とのコミュニケーションによる相談や援助の裏づけが、自己肯定感の強い子どもたちと低い子どもたちでは異なるなかで、将来にわたって社会に貢献する意欲や安心安全な将来への希望にも格差が生まれているとみえようか。

いうならば、ある種の意欲格差（インテンシブデバインド）が起こっているようにみえ、それは、「世界で活躍する」といった出世主義的な価値の競争と異なり、「自由にのんびり暮らす」といったリスクの少ない平和な安定した暮らし方にアクセスできるかどうかを示しているようにみえる（図表 17、図表 18）。

自己肯定感の高低には、子どもたちなりの身近な人と安心して暮らせる日常の手ごたえが示されていると思え、まとめていえば、社会関係のなかでの自己肯定感の醸成過程に注目していく必要がある調査結果となっている。

図表 15 自己肯定感別、社会に役立ちたい

(%)

		全体 (人)	そう思う	どちらか といえば、 そう思う	どちらか といえば、そ う思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう思わな い(計)
全 体		1,926	47.7	40.9	7.7	2.7	1.0	88.6	10.4
自 己 コ 肯 定 感	A 高得点グループ	528	68.0	26.5	3.0	1.9	0.6	94.5	4.9
	B 中上グループ	655	47.8	43.8	6.6	1.4	0.5	91.6	7.9
	C 中下グループ	499	35.9	51.9	9.2	2.0	1.0	87.8	11.2
	D 低得点グループ	244	27.9	41.4	18.0	9.4	3.3	69.3	27.5

図表 16 自己肯定感別、将来の展望

(%)

		全体 (人)	希望がある	どちらか といえば希望 がある	どちらか といえば希望 がない	希望がない	無回答	希望がある (計)	希望がない (計)
全 体		1,926	42.6	39.1	12.9	4.4	1.0	81.7	17.3
自 己 コ 肯 定 感	A 高得点グループ	528	71.2	24.1	3.0	1.1	0.6	95.3	4.2
	B 中上グループ	655	43.2	47.9	6.9	1.4	0.6	91.1	8.2
	C 中下グループ	499	24.6	49.3	20.4	4.4	1.2	73.9	24.8
	D 低得点グループ	244	15.6	27.0	35.2	19.3	2.9	42.6	54.5

図表 17 自己肯定感別、ポスト青年期の自己像「自由にのんびり暮らす」

(%)

		全体 (人)	そう思う	どちらか といえば、 そう思う	どちらか といえば、 そう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう思わ ない(計)
全 体		1,926	38.9	37.9	15.8	6.3	1.0	76.8	22.2
自 己 肯 定 感	A 高得点グループ	528	48.5	30.5	14.8	5.7	0.6	79.0	20.5
	B 中上グループ	655	41.5	39.4	14.4	3.8	0.9	80.9	18.2
	C 中下グループ	499	31.3	43.3	17.6	7.0	0.8	74.5	24.6
	D 低得点グループ	244	26.6	38.9	18.4	13.1	2.9	65.6	31.6

図表 18 ポスト青年期の自己像「世界で活躍する」

(%)

		全体 (人)	そう思う	どちらか といえば、 そう思う	どちらか といえば、 そう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう思わ ない(計)
全 体		1,926	10.7	12.8	31.6	43.2	1.7	23.5	74.8
自 己 肯 定 感	A 高得点グループ	528	19.7	19.9	32.4	27.1	0.9	39.6	59.5
	B 中上グループ	655	8.9	12.2	35.1	42.6	1.2	21.1	77.7
	C 中下グループ	499	6.4	9.2	30.7	51.5	2.2	15.6	82.2
	D 低得点グループ	244	5.3	6.1	22.5	62.7	3.3	11.5	85.2

2. 「子供・若者総合調査」の実施に向けた調査研究：学校現場の立場からの所見

小平市立小平第五中学校 校長 青木 由美子

はじめに

児童・生徒を取り巻く環境には、いじめ、不登校、インターネットの活用に関する事など、集団や自己の生活上の課題が山積している。たとえば不登校について、その要因を探ると、学力、家庭環境、人間関係形成力など様々である。学校においては、そうした課題を解決するための様々な教育活動に取り組んでいる。ここでは、調査結果を児童生徒が直面する課題に照らして捉え、どのような教育活動が求められるかについて考察していきたい。

1 人生観・充実度

(1) 自己認識

集計結果からは、「今の自分が好きだ」の問いに対して、2割程度の生徒が否定的に捉えていることが分かる(図表1-1)。調査対象児童生徒の年齢が高いほど否定的に捉える割合は高くなり、特に中学生女子の約4人に1人は自分を肯定的に捉えられていない現状が把握できる。年齢が高くなるにつれて自己理解が進み、学習面や生活面において、他者との比較や理想の自分との比較によって、現状の自分に満足できていないのではないかと推測される。他者と比較するのではなく、ありのままの自分を受け止め、なりたい自分に近づけられるよう、理想が叶えられるように努力することの大切さを指導するとともに、親や教員が、児童生徒のよさを積極的に認めたり、児童生徒同士が互いによさを認め合えるような学習の機会を設けたりすることが必要であると感じる。

また、「自分は親から愛されていると思うか」の問いに対しては、いずれの学年においても95%を超えている。思春期にあって、反抗期を迎えている年代の児童生徒にとっても、親子の関係を肯定的に捉えていると把握できるが、一方で、親への信頼感がもてていない生徒もあり、それが原因となって不登校となっている生徒もいる現状がある。そうした生徒に対しては、学級担任など、生徒にとって身近な大人から大事にされていると感じる機会をもたせることが重要になってくる。

「うまくいくかわからないことにもがんばって取り組む」の問いに対して、約18%の児童生徒が否定的に捉えていることについては残念に思う。中学生にとっての「うまくいくかわからないこと」として、学力向上や進路選択が挙げられると推測される。学習習慣が身に付かず授業についていけない現状や、目指す進路先に向けて頑張り切れずあきらめてしまう現状も少なからずある。そうした児童生徒に対しては、本人に合った目標設定を指導していく必要を感じる。

「自分は役に立たないと強く感じる」の問いに対して、22.3%の児童生徒、つまり4～5人に一人、学級に2人程度の児童生徒が肯定的な回答をしていることについても非常に残念である。児童生徒には、学級や学校の係活動や委員会活動、学校行事などにおいて、それぞれ役割をもたせるが、そうした役割に対して達成感を感じさせることが大切であり、また、学校や地域におけるボランティア活動などに積極的に参加できるような機会を設ける必要がある。

図表 1 - 1 自己認識

ア) 今の自分が好きだ

(%)

		n	あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない	無回答	あてはまる(計)	あてはまらない(計)	
全 体		1,926	33.5	45.2	15.9	4.9	0.4	78.7	20.9	
性・年齢別	男性	10歳	138	47.8	39.1	7.2	5.8	-	87.0	13.0
		11歳	157	42.7	44.6	8.9	3.2	0.6	87.3	12.1
		12歳	156	33.3	49.4	12.2	3.8	1.3	82.7	16.0
		13歳	159	30.2	49.7	14.5	5.7	-	79.9	20.1
		14歳	177	36.7	46.9	12.4	4.0	-	83.6	16.4
	女性	15歳	197	37.6	41.6	15.2	5.6	-	79.2	20.8
		10歳	128	35.2	48.4	12.5	3.1	0.8	83.6	15.6
		11歳	175	30.9	44.0	18.3	6.3	0.6	74.9	24.6
		12歳	152	33.6	44.1	17.1	4.6	0.7	77.6	21.7
		13歳	152	25.0	51.3	19.1	3.9	0.7	76.3	23.0
14歳	153	28.8	41.2	24.8	5.2	-	69.9	30.1		
15歳	153	24.2	46.4	24.2	5.2	-	70.6	29.4		

イ) 自分は親(保護者)から愛されていると思う

(%)

		n	あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない	無回答	あてはまる(計)	あてはまらない(計)	
全 体		1,926	72.3	24.1	2.4	0.7	0.4	96.5	3.1	
性・年齢別	男性	10歳	138	79.0	18.8	0.7	0.7	0.7	97.8	1.4
		11歳	157	80.9	17.2	0.6	1.3	-	98.1	1.9
		12歳	156	69.9	25.6	2.6	0.6	1.3	95.5	3.2
		13歳	159	69.2	27.7	3.1	-	-	96.9	3.1
		14歳	177	66.7	31.1	1.7	0.6	-	97.7	2.3
	女性	15歳	197	65.5	29.9	4.1	0.5	-	95.4	4.6
		10歳	128	82.8	14.1	2.3	0.8	-	96.9	3.1
		11歳	175	77.1	19.4	2.9	-	0.6	96.6	2.9
		12歳	152	78.9	17.1	3.3	0.7	-	96.1	3.9
		13歳	152	66.4	28.9	2.0	1.3	1.3	95.4	3.3
14歳	153	68.0	30.1	1.3	-	0.7	98.0	1.3		
15歳	153	71.9	24.2	3.3	0.7	-	96.1	3.9		

ウ) うまくいかわからないことにもがんばって取り組む

(%)

		n	あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない	無回答	あてはまる(計)	あてはまらない(計)	
全 体		1,926	37.0	44.3	15.1	3.2	0.4	81.4	18.2	
性・年齢別	男性	10歳	138	37.7	43.5	15.2	2.9	0.7	81.2	18.1
		11歳	157	42.7	44.6	11.5	1.3	-	87.3	12.7
		12歳	156	36.5	43.6	16.0	2.6	1.3	80.1	18.6
		13歳	159	32.1	40.3	22.6	5.0	-	72.3	27.7
		14歳	177	31.6	52.0	13.0	2.8	0.6	83.6	15.8
	女性	15歳	197	39.1	41.6	13.7	5.1	0.5	80.7	18.8
		10歳	128	41.4	44.5	10.9	2.3	0.8	85.9	13.3
		11歳	175	36.6	44.0	14.3	4.6	0.6	80.6	18.9
		12歳	152	48.0	36.8	11.8	3.3	-	84.9	15.1
		13歳	152	31.6	50.0	15.1	2.6	0.7	81.6	17.8
14歳	153	33.3	46.4	17.6	2.6	-	79.7	20.3		
15歳	153	35.3	46.4	16.3	2.0	-	81.7	18.3		

エ) 自分は役に立たないと強く感じる

(%)

		n	あてはまる	どちらかといえはあてはまる	どちらかといえはあてはまらない	あてはまらない	無回答	あてはまる(計)	あてはまらない(計)	
全 体		1,926	6.1	16.3	39.8	37.4	0.5	22.3	77.2	
性・年齢別	男性	10歳	138	6.5	19.6	30.4	42.8	0.7	26.1	73.2
		11歳	157	5.1	10.2	40.8	43.9	-	15.3	84.7
		12歳	156	5.1	19.2	41.0	33.3	1.3	24.4	74.4
		13歳	159	5.0	12.6	45.3	37.1	-	17.6	82.4
		14歳	177	4.0	15.3	44.1	36.2	0.6	19.2	80.2
	女性	15歳	197	6.6	16.2	39.1	37.1	1.0	22.8	76.1
		10歳	128	7.8	14.8	34.4	43.0	-	22.7	77.3
		11歳	175	6.3	16.0	34.3	42.9	0.6	22.3	77.1
		12歳	152	4.6	12.5	41.4	41.4	-	17.1	82.9
		13歳	152	5.9	20.4	45.4	27.6	0.7	26.3	73.0
14歳	153	6.5	17.6	40.5	35.3	-	24.2	75.8		
15歳	153	8.5	19.0	41.8	29.4	1.3	27.5	71.2		

(2) 幸福感

「自分が幸せだと思いますか」の問いに対して、いずれの年齢においてもほぼ90%を超える児童生徒が肯定的な回答をしている(図表1-2)。一方で、「そう思う」のみの回答については、年齢が上がるにつれて低くなっており、50%~60%台にとどまっている。さらに、性別不明及び父子同居世帯と回答した児童生徒については、「そう思う」のみの回答が、約半数となっていることから、性自認や家族構成等に関する悩みを抱えることが幸福感を阻害している場合があるのではないかと推測する。こうした現状を踏まえて、相談体制を充実させたり、児童生徒に対する相談窓口の周知を行ったりする必要はある。

図表1-2 幸福感

		n	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1,926	64.5	29.1	4.8	1.1	0.6	93.6	5.9
性 別	男	984	64.6	29.2	4.8	0.8	0.6	93.8	5.6
	女	913	65.3	28.5	4.6	1.2	0.4	93.8	5.8
	不明	29	34.5	44.8	10.3	6.9	3.4	79.3	17.2
年 齢 別	10歳	269	71.4	23.8	2.2	1.5	1.1	95.2	3.7
	11歳	334	71.6	22.2	5.1	0.9	0.3	93.7	6.0
	12歳	312	70.2	25.3	2.6	0.6	1.3	95.5	3.2
	13歳	319	60.8	32.3	6.0	0.9	-	93.1	6.9
	14歳	339	58.7	34.5	4.4	1.8	0.6	93.2	6.2
	15歳	353	56.4	34.8	7.6	0.8	0.3	91.2	8.5
同居形態別	二世代世帯・両親同居	1,432	66.5	27.5	4.4	1.1	0.5	94.0	5.5
	二世代世帯・父子同居	16	31.3	56.3	12.5	-	-	87.5	12.5
	二世代世帯・母子同居	193	57.0	33.2	8.8	0.5	0.5	90.2	9.3
	上記以外の世帯	282	61.3	33.0	3.5	1.4	0.7	94.3	5.0
	きょうだいあり	1,578	66.1	27.9	4.4	1.1	0.5	94.0	5.4
	きょうだいなし	345	57.1	34.5	6.7	1.2	0.6	91.6	7.8
	同居家族無回答	3	66.7	-	-	-	-	33.3	-

(3) 居場所

学校教育に携わる立場として、児童生徒にとって、家庭はもちろん、生活時間の約半分を過ごす学校が居場所の一つになってほしいと思う。

学校生活の重点をおく居場所は、学級であったり、部活動の活動場所であったり、学校図書館(図書室)であったりするなど、児童生徒によって異なる(図表1-3-1)。そんな中、家庭については9割以上の児童生徒が居場所として肯定的に捉えており、学校を居場所と捉える割合については概ね70%~80%の児童生徒が肯定的に捉えている。小学校後半にその割合が減少し、中学校以降で増加している。このことについては、中学校入学後は部活動や委員会活動など、学級以外にも活動範囲が広がることから、自分に適した居場所となっているのではないかと推測される。

また、「インターネット空間が居場所になっているか」の問いに対して、60%~70%の児童生徒が肯定的な回答をしており、年齢が上がるに伴って数値も増加している。スマートフォンやゲーム機の所有率と関係していると推測される。

一方で、子供を取り巻く環境において、インターネットを活用することによるトラブルが少なからず発生している。

実際に、全国47都道府県の公立中学校551校の校長が回答した令和3年度の全日本中学校長会の調査によると、「貴校における携帯電話等にかかわる生徒指導上の問題」について、94.7%の校長が「インターネット上やSNSにかかわるトラブル」と回答している。こうした実態を踏まえて、児童生徒がインターネットトラブルに巻き込まれないように、情報モラルに関する指導を充実させる必要がある。

図表1-3-1 居場所

ア) 自分の部屋

(%)

		n	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1,926	67.9	17.7	4.3	6.4	3.7	85.6	10.7
年 齢 別	10歳	269	56.5	22.7	5.2	10.4	5.2	79.2	15.6
	11歳	334	59.9	17.1	6.9	9.6	6.6	76.9	16.5
	12歳	312	65.7	20.2	4.2	6.4	3.5	85.9	10.6
	13歳	319	71.8	19.4	2.8	3.8	2.2	91.2	6.6
	14歳	339	75.8	12.4	3.8	5.3	2.7	88.2	9.1
	15歳	353	74.8	15.9	3.1	3.7	2.5	90.7	6.8

イ) 家族(親せきの家を含む)

(%)

		n	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1,926	70.7	21.5	3.9	2.0	1.9	92.2	5.9
年 齢 別	10歳	269	81.8	13.0	1.5	1.5	2.2	94.8	3.0
	11歳	334	74.6	18.3	3.9	1.2	2.1	92.8	5.1
	12歳	312	72.8	20.2	2.9	1.9	2.2	92.9	4.8
	13歳	319	68.7	21.3	4.7	2.8	2.5	90.0	7.5
	14歳	339	64.3	26.5	5.3	2.9	0.9	90.9	8.3
	15歳	353	64.6	27.5	4.8	1.4	1.7	92.1	6.2

ウ) 学校

(%)

		n	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1,926	40.5	36.1	13.0	7.8	2.6	76.6	20.8
年 齢 別	10歳	269	48.7	31.6	10.0	6.3	3.3	80.3	16.4
	11歳	334	42.5	37.7	12.3	4.8	2.7	80.2	17.1
	12歳	312	39.4	37.2	12.2	9.0	2.2	76.6	21.2
	13歳	319	36.7	34.2	14.7	11.3	3.1	70.8	26.0
	14歳	339	37.8	36.6	15.9	7.1	2.7	74.3	23.0
	15歳	353	39.4	38.2	12.2	8.5	1.7	77.6	20.7

エ) 地域(図書館や公民館や公園など、現在住んでいる周辺やそこにある建物など)

(%)

		n	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1,926	28.2	38.3	18.7	12.5	2.3	66.5	31.2
年 齢 別	10歳	269	34.6	40.9	13.0	9.3	2.2	75.5	22.3
	11歳	334	32.0	32.0	18.9	14.4	2.7	64.1	33.2
	12歳	312	29.2	38.5	16.7	13.8	1.9	67.6	30.4
	13歳	319	25.1	39.2	21.9	11.6	2.2	64.3	33.5
	14歳	339	25.4	40.4	20.4	11.5	2.4	65.8	31.9
	15歳	353	24.6	39.1	20.4	13.6	2.3	63.7	34.0

オ) インターネット空間(SNS、YouTubeやオンラインゲームなど)

(%)

		n	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全 体		1,926	39.0	30.4	15.0	13.2	2.4	69.4	28.2
年 齢 別	10歳	269	37.5	23.4	17.8	17.5	3.7	61.0	35.3
	11歳	334	31.4	32.9	13.8	19.2	2.7	64.4	32.9
	12歳	312	36.9	29.2	15.4	17.0	1.6	66.0	32.4
	13歳	319	41.7	30.4	14.1	11.6	2.2	72.1	25.7
	14歳	339	43.4	33.0	13.9	7.7	2.1	76.4	21.5
	15歳	353	42.5	32.0	15.3	7.9	2.3	74.5	23.2

居場所の有無については(図表 1-3-2) 90%以上の児童生徒が、一つ以上を居場所と捉えている現状がある。さらに、いずれも居場所になっていない児童生徒が6人(0.3%)確認されるが、居場所が全くないと感じているのか、質問項目に示されている居場所以外を居場所と捉えているのが不明である。実際に、どこにも自分の居場所がないと感じている児童生徒がいるかもしれないという想定は必要である。

図表 1-3-2 居場所の有無

		n	1つ居場所 になっている	2つ居場所 になっている	3つ居場所 になっている	4つ居場所 になっている	5つ居場所 になっている	いずれも居 場所になっ ていない (計)	無回答
全 体		1,926	1.7	7.3	18.8	26.3	39.4	0.3	6.2
年 齢 別	10歳	269	2.2	6.7	15.6	26.8	38.7	-	10.0
	11歳	334	2.7	5.7	23.4	26.9	33.2	-	8.1
	12歳	312	1.6	9.0	17.6	29.5	37.5	-	4.8
	13歳	319	2.2	7.5	18.5	24.8	41.4	0.9	4.7
	14歳	339	0.9	8.0	18.3	25.1	42.2	0.3	5.3
	15歳	353	0.8	6.8	19.0	24.9	43.1	0.6	4.8

(4) 孤独感

「さみしいと感じることが多い」や「ひとりぼっちだと感じる人が多い」の問いに対して、概ね8割以上の児童生徒が否定的な回答をしており、孤独感を感じている児童生徒は少ない現状がある(図表 1-4)。孤独感を感じている児童生徒は、男子より女子の方が多い傾向である。また、二世帯世帯・父子同居世帯の場合、4人に1人の割合で、孤独感を感じている実態が把握できる。

また、「こまったときに誰も助けてくれないと感じる」「自分には話せる人がいないと感じる」の問いに対して、いずれもほぼ90%を超える生徒が否定的な回答をしており、おおむね家庭や学校など生徒を取り巻く環境の中で、困ったときの相談や日常的な会話などのできる人間関係があるものと思われる。一方で約10%程度の生徒は肯定的な回答をしており、学級内の数名は孤独感や孤立感を抱えていると推測される。

学級においては、学級担任が個別の面談などを通して児童生徒の実態把握を行い、そうした児童生徒への配慮をしていくことはもちろんのこと、児童生徒が困ったときには互いに助け合い、思いやりの気持ちをもてる温かい集団づくりができる学級経営力を教師が身に付けることや、学校全体での相談体制の充実が必要である。

図表 1-4 孤独感

ア) さみしいと感じることが多い

		n	そう思う	どちらかとい えばそう 思う	どちらかとい えばそう 思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう 思わない (計)
全 体		1,926	5.7	12.4	29.8	50.6	1.6	18.1	80.3
性 別	男	984	5.5	10.4	27.1	55.4	1.6	15.9	82.5
	女	913	5.8	14.5	32.9	45.3	1.5	20.3	78.2
	不明	29	6.9	17.2	20.7	51.7	3.4	24.1	72.4
	同居形態別	二世帯世帯・両親同居	1,432	5.6	11.6	29.5	52.0	1.3	17.2
	二世帯世帯・父子同居	16	18.8	6.3	18.8	56.3	-	25.0	75.0
	二世帯世帯・母子同居	193	5.7	13.5	34.7	42.5	3.6	19.2	77.2
	上記以外の世帯	282	5.3	16.0	28.4	48.9	1.4	21.3	77.3
	きょうだいあり	1,578	5.1	11.7	29.7	52.0	1.5	16.8	81.7
	きょうだいなし	345	8.1	15.7	30.1	44.3	1.7	23.8	74.5
	同居家族無回答	3	-	33.3	-	33.3	33.3	33.3	33.3

図表 1-4 孤独感・つづき

イ) ひとりぼっちだと感じるが多い

(%)

		n	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう 思わない (計)
全 体		1,926	4.6	8.6	24.2	61.1	1.6	13.2	85.3
性 別	男	984	3.7	7.5	22.7	64.6	1.5	11.2	87.3
	女	913	5.4	9.4	26.0	57.7	1.5	14.8	83.7
	不明	29	10.3	20.7	20.7	44.8	3.4	31.0	65.5
同居形態別	二世代世帯・両親同居	1,432	3.8	8.5	23.7	62.7	1.3	12.3	86.5
	二世代世帯・父子同居	16	18.8	6.3	25.0	50.0	-	25.0	75.0
	二世代世帯・母子同居	193	6.2	9.8	24.4	56.0	3.6	16.1	80.3
	上記以外の世帯	282	6.7	8.5	26.6	56.7	1.4	15.2	83.3
	きょうだいあり	1,578	4.1	8.0	23.5	62.8	1.5	12.2	86.3
	きょうだいなし	345	6.7	11.3	27.5	53.0	1.4	18.0	80.6
	同居家族無回答	3	-	-	-	66.7	33.3	-	66.7

ウ) まわりから、取りのこされていると感じる

(%)

		n	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう 思わない (計)
全 体		1,926	3.5	8.8	22.3	63.9	1.6	12.3	86.2
性 別	男	984	3.4	7.4	19.5	68.2	1.5	10.8	87.7
	女	913	3.5	9.4	25.4	60.1	1.5	12.9	85.5
	不明	29	6.9	34.5	20.7	34.5	3.4	41.4	55.2
同居形態別	二世代世帯・両親同居	1,432	3.1	7.8	22.3	65.6	1.3	10.9	87.8
	二世代世帯・父子同居	16	12.5	12.5	12.5	62.5	-	25.0	75.0
	二世代世帯・母子同居	193	7.3	10.9	19.7	58.5	3.6	18.1	78.2
	上記以外の世帯	282	2.5	12.1	25.2	58.9	1.4	14.5	84.0
	きょうだいあり	1,578	3.0	8.4	22.3	65.0	1.4	11.3	87.3
	きょうだいなし	345	5.8	10.7	22.6	58.8	2.0	16.5	81.4
	同居家族無回答	3	-	-	-	66.7	33.3	-	66.7

エ) こまったときに、だれも助けてくれないと感じる

(%)

		n	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう 思わない (計)
全 体		1,926	1.5	5.2	19.8	71.8	1.6	6.7	91.6
性 別	男	984	1.4	4.3	19.7	73.2	1.4	5.7	92.9
	女	913	1.5	6.0	19.7	71.0	1.8	7.6	90.7
	不明	29	3.4	13.8	27.6	51.7	3.4	17.2	79.3
同居形態別	二世代世帯・両親同居	1,432	1.3	5.2	18.9	73.1	1.5	6.5	92.0
	二世代世帯・父子同居	16	-	-	12.5	87.5	-	-	100.0
	二世代世帯・母子同居	193	3.6	5.7	20.2	67.9	2.6	9.3	88.1
	上記以外の世帯	282	1.4	5.3	25.2	66.7	1.4	6.7	91.8
	きょうだいあり	1,578	1.3	4.9	19.1	72.9	1.6	6.3	92.1
	きょうだいなし	345	2.3	6.7	23.2	66.4	1.4	9.0	89.6
	同居家族無回答	3	-	-	-	100.0	-	-	100.0

オ) 自分には話せる人がいないと感じる

(%)

		n	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかといえ ばそう思わない	そう 思わない	無回答	そう思う (計)	そう 思わない (計)
全 体		1,926	1.7	4.7	16.1	76.0	1.6	6.3	92.1
性 別	男	984	1.0	4.2	15.2	77.9	1.6	5.2	93.2
	女	913	2.2	5.1	16.6	74.5	1.5	7.3	91.1
	不明	29	6.9	6.9	27.6	58.6	-	13.8	86.2
同居形態別	二世代世帯・両親同居	1,432	1.5	4.2	15.0	77.9	1.3	5.7	92.9
	二世代世帯・父子同居	16	-	-	12.5	87.5	-	-	100.0
	二世代世帯・母子同居	193	2.6	5.2	19.7	68.9	3.6	7.8	88.6
	上記以外の世帯	282	1.8	7.1	19.5	70.2	1.4	8.9	89.7
	きょうだいあり	1,578	1.5	4.7	15.3	77.0	1.5	6.2	92.3
	きょうだいなし	345	2.3	4.6	20.0	71.3	1.7	7.0	91.3
	同居家族無回答	3	-	-	-	100.0	-	-	100.0

2 子供・若者が抱える困難

「ものごとがうまくいかず落ち込んだ経験があった」との問いに対して、50%～70%台の児童生徒が肯定的な回答をしている（図表2-1）。年齢が上がるにつれて、その数値は高くなっている。小学校高学年から中学校にかけて、例えば学習面では、勉強をしても思うように成績が伸びなかったり、部活動において一生懸命に練習をしても上達せず試合に勝てなかったり、人間関係において、友達と意見が合わず仲たがいをしたりする経験は、年齢が上がるにつれて必然的に多くなっていく。中学校受験や高等学校等への進路選択においても、希望する学校に合格できなかった経験も少なくないだろう。これらが年齢とともに数値が上昇する要因の一つではないかと推測する。

一方で、「ものごとがうまくいかず落ち込んだ状態が元に戻った経験があった」との問いに対しては、いずれの年齢層も約90%が肯定的な回答をしており、大方の児童生徒が、困難な状態から立ち直っている状況が把握できる（図表2-2）。

図表2-1 ものごとがうまくいかず落ち込んだ経験の有無

		n	あった	どちらかといえばあった	どちらかといえばなかった	なかった	わからない、答えられない	無回答	ものごとがうまくいかず落ち込んだ経験があった（計）	ものごとがうまくいかず落ち込んだ経験はなかった（計）
全 体		1,926	42.5	22.5	14.5	11.9	6.2	2.3	65.0	26.4
年 齢 別	10歳	269	32.7	20.8	16.0	17.8	10.0	2.6	53.5	33.8
	11歳	334	41.9	21.3	16.5	10.8	6.6	3.0	63.2	27.2
	12歳	312	40.1	25.0	14.4	12.5	4.2	3.8	65.1	26.9
	13歳	319	42.6	21.3	15.0	12.2	6.3	2.5	63.9	27.3
	14歳	339	44.8	23.3	14.7	10.0	5.9	1.2	68.1	24.8
	15歳	353	50.1	23.2	10.8	9.6	5.1	1.1	73.4	20.4

図表2-2 ものごとがうまくいかず落ち込んだ状態が元にもどった経験の有無

		n	あった	どちらかといえばあった	どちらかといえばなかった	なかった	わからない	無回答	ものごとがうまくいかず落ち込んだ状態が元にもどった経験があった（計）	ものごとがうまくいかず落ち込んだ状態が元にもどった経験はなかった（計）
全 体		1,252	67.4	22.0	3.7	2.1	4.3	0.5	89.5	5.8
年 齢 別	10歳	144	66.0	23.6	2.8	3.5	4.2	-	89.6	6.3
	11歳	211	72.5	17.5	3.8	1.9	3.8	0.5	90.0	5.7
	12歳	203	72.4	15.8	3.4	1.0	6.9	0.5	88.2	4.4
	13歳	204	63.7	24.5	2.5	2.9	5.4	1.0	88.2	5.4
	14歳	231	61.9	27.7	4.8	1.3	3.9	0.4	89.6	6.1
	15歳	259	68.0	22.8	4.2	2.3	2.3	0.4	90.7	6.6

また、立ち直ったきっかけとして、おおむね2人に1人が「家族や親せきの助け」「友達の助け」と回答し、おおむね4人に1人が「学校の先生の助け」と回答している。年齢が上がるにつれて「家族や親せきの助け」より「友達の助け」と回答する児童生徒が多くなっている（図表2-3）。

さらに、「時間がたって状況が変化した」や「自分の努力で乗り越えた」の回答が多くなっていることから、周囲の人の助けを借りながら、子供たちが困難を乗り越え、困難に立ち向かっている現状があると考えられる。これらの結果から、困難に直面した時に粘り強くそれを乗り越えようとする態度を身に付けさせることが大切で、そのために、家族や友達、教師などが支援できるような働きかけや、互いに助け合える人間関係を構築できるような教育活動の工夫、相談体制の構築が有効であると考えられる。

図表2-3 落ち込んだ状態が元にもどったきっかけ

		n	友だちの助け	家族や親せきの助け	と自分の努力で乗り越えたこと	時間がたって状況が変化したこと	学校の先生の助け	趣味の活動に参加したこと	同じようにうまくいかなかった経験をした人に話してみたこと	環境が変わったこと	引越したり転校、クラス替えなどがあつて、まわりの	スクールカウンセラーなど	電話やインターネットで相談したこと	病院や相談場所に行つて相談したこと	地域の人の助け	その他	わからない、答えられない	無回答
全	体	1,120	56.1	52.7	41.3	38.8	23.2	15.1	7.6	2.9	2.5	2.4	1.7	1.0	5.8	3.9	0.3	
年	10歳	129	56.6	67.4	33.3	29.5	29.5	14.0	7.0	1.6	2.3	-	3.9	2.3	4.7	3.9	-	
	11歳	190	52.1	53.7	38.4	39.5	20.5	10.0	6.8	2.1	2.6	-	0.5	-	7.4	5.3	-	
	12歳	179	57.5	50.8	40.8	35.8	26.3	10.1	4.5	1.7	2.2	2.8	1.7	1.1	8.4	2.2	-	
	13歳	180	54.4	48.9	46.1	37.2	17.2	16.7	10.6	3.3	2.2	5.0	1.7	0.6	3.9	4.4	0.6	
	14歳	207	51.2	48.8	39.1	37.2	24.2	18.8	6.8	4.3	2.4	2.4	1.0	1.0	6.3	4.8	1.0	
	15歳	235	63.4	51.5	46.4	48.1	23.4	19.1	9.4	3.4	3.0	3.4	2.1	1.3	4.3	3.0	-	

3 他者との関わり

「何でも悩みを相談できる人」についての問いに対して、「家族・親せき」は約 87%、「学校で出会った友だち」は約 83%、「地域の人」は約 44%、「インターネット上における人やグループ」は約 19%の児童生徒が肯定的な回答をしている（図表 3 - 1）。

「こまったときは助けてくれる人」についての問いに対して、「家族・親せき」は約 96%、「学校で出会った友だち」は約 94%、「地域の人」は約 66%、「インターネット上における人やグループ」は約 21%の児童生徒が肯定的な回答をしている（図表 3 - 1）。

「他の人には言えない本音を話せることがある人」についての問いに対して、「家族・親せき」は約 77%、「学校で出会った友だち」は約 75%、「地域の人」は約 34%、「インターネット上における人やグループ」は約 18%の児童生徒が肯定的な回答をしている（図表 3 - 1）。

これらの結果を分析すると、悩みを相談したり、困ったときに助けを求めたりする他者として、家族や親せき、友達を対象としている児童生徒が 80%台から 90%台となっており、おおむね 1 人で悩まずに困難を回避しようとする気持ちをもっていると推測できる。他の人には言えない本音を話せる他者については、家族や親せき、友達を対象としている児童生徒が 70%台とやや低く、4 人に 1 人は本音を話せる他者がいない現状があると推測される。思春期の児童生徒にとって、性や人間関係、将来、家族についての悩みなど、他の人には言いにくいことが増えてくることが考えられる。

また、地域の人については、いずれの項目も低い結果となっている。このことについては、地域の人との関係が希薄になっている現代社会の現状が背景にあるともとらえられるが、このコロナ禍の中で、地域の活動が激減し、地域の人との関わる機会が少なくなっていることも要因として考えられる。その一方で、「インターネット上における人やグループ」との関わりが少なからず存在することについては、SNS等を介して不適切な関係性を構築している可能性もあるのではないかと危惧される。

これらのことから、学校教育においては、悩みや困難な状況を一人で抱え込まず、信頼できる大人や友達に相談することを促していく必要がある。また、学級活動などを通して心を許し合える友達作りなど人間関係を構築できる教育活動の工夫や、互いを思いやり信頼し合える学級風土を構築できる学級づくりが必要である。さらに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどに相談できる体制を構築することが求められる。インターネットの活用については、1（3）で述べた通り、児童生徒に対して情報モラルや情報セキュリティの指導が欠かせないことも認識する必要がある。とりわけ、不安を抱える思春期児童生徒の悩みに付け込んだ悪質なサイバースペースの存在についても児童生徒に周知し、注意を促すことが大切である。

図表 3 - 1 他者との関わり

	他者とのかかわり「そう思う（計）」			
	家族・親せき	友学だ校ちでと出会った	ど事の地（）で人域の、の友塾人だや（ち習近ない所	グ上イルにン おタプけ るネ人ツやト
ア 何でも悩みを相談できる人がいる	87.0	83.1	44.0	18.5
イ こまったときは助けてくれる	96.0	93.8	65.6	21.0
ウ 他の人には言えない本音を話せることがある	77.0	75.4	34.4	17.5

4 支援機関

「家庭や学校以外で悩みや困りごとを相談できる場所」について、約 29%の児童生徒が「知らない」と回答している（図表 4 - 1）。

また、「相談したり助けてもらったりしやすいと感じる」対象については（図表 4 - 2）家族や親せき、学校の友だちはおおむね 70%台となっているが、学校の先生は 30%台、スクールカウンセラーなどの専門家は約 9%にとどまる。学校においては、個別の面談の機会や日々のコミュニケーションを通して、児童生徒の状況把握が必要であり、相談室の利用についての周知など学校で相談しやすい環境の整備が求められる。

また、家族や親せき、友達のいずれにも、悩みを相談したり、困ったときに助けを求めたりすることができない児童生徒が 3 %程度であることを踏まえ、一定の割合で孤立感を抱いている現状があることも認識し、その支援が必要である。

図表 4 - 1 支援機関の認知

		（%）		
	n	知っている	知らない	無回答
全 体	1,926	70.0	29.0	0.9

図表 4 - 2 相談したり助けてもらったりしやすいと感じる対象

		（%）													
	n	家族や親せき	学校の友だち	地域の友だち	先輩や後輩	学校の先生	スクールカウンセラーなど学校にいる専門家	地域の人	（病院や相談場所など）にいる専門家	同じように落ち込んだ経験をした人	その他	誰にも相談したり、助けてもらったりしようと思わない	わからない	無回答	相談したり、助けてもらったりしやうと思う人がいる（計）
全 体	1,926	76.9	74.5	14.3	13.4	37.7	8.8	2.6	5.7	15.1	2.1	3.2	3.5	0.7	92.6

5 学校以外で他者と行う活動

「学校以外でだれかと一緒に参加したいと思う」活動として、「映画、展覧会をみたり、音楽をきいたりする」活動や、「旅行に行く」「スポーツをする・スポーツの試合をみる」「自然体験」「地域行事」などの活動を挙げている児童生徒が多くみられた。「この中に、誰かと一緒に参加したいと思うものがある」児童生徒は90%を超えている（図表5-1）。

ここ2年間ほどはコロナ禍の中で、修学旅行や移動教室などの宿泊行事や部活動、地域のイベントが十分に実施できない状況にあることも背景となっていると推測される。

東京都中学校特別活動研究会が令和2年7月～8月に都内公立中学校の教員を対象にした調査では、62%の学校で宿泊行事を「実施していない（今後も実施しない）」と回答している。「実施する予定」と回答した学校もその多くが、その後の中止を余儀なくされたと思われる。

学校の教育活動では、宿泊行事などの学校行事や部活動などを通して、人間関係を構築したり、友達との絆を深めたりすることができる。このことから、これまで述べてきたような、児童生徒の孤独感、子供・若者が抱える困難、他者との関りなどの課題を解決する上でも、こうした活動が再び平常に実施できることが望まれる。

図表5-1 学校以外で他者と行う活動

	n	映画、展覧会をみたり、音楽をきいたりする	絵をかき・音楽などを作ったり演奏したりする	スポーツをする・スポーツの試合をみる	自然体験（キャンプ、川遊び、星の観察など）	国際交流（外国人と仲良くする、ホームステイなど）	旅行に行く	学校の宿題や塾の課題などの勉強を手伝ってもらう	習い事をする	ボランティア（老人ホームに行くなど）	地域行事（祭りなど）	地域活動（公園清掃、子ども会活動、防災訓練など）	あてはまるものはない	無回答	この中に、誰かと一緒に参加したいと思うものがある（計）
全 体	1,926	65.7	29.4	51.6	50.1	16.7	63.9	30.0	30.3	11.5	40.2	14.5	6.2	1.1	92.6

6 社会参加

社会貢献への意欲について、「あなたは、『社会のために役立つことをしたい』と思いますか」の問いに対して、いずれの年齢層もおおむね90%の児童生徒が肯定的な回答をしており、学校教育のねらいに対して良好な結果であると思う（図表6-1）。

ボランティア活動への興味については（図表6-2）、約半数の児童生徒が肯定的な回答をしている。

多くの中学校では、生徒会活動などを中心にボランティア活動を実施しており、先に述べた東京都中学校特別活動研究会の調査結果においても、48%の学校で、地域清掃やユニセフや災害地への募金活動、リサイクル活動、ペットボトルキャップやベルマークの回収、挨拶運動など、コロナ禍の中でも工夫をして実施している（実施する予定）ことが示されている。

一方で、約10人に1人は社会貢献への意欲に否定的な回答をしており、また約半数の児童生徒がボランティア活動への興味について、興味がない・わからないと回答していることにも注目したい。

図表6-1 社会貢献への意欲

		n	そう思う	どちらかといえば、そう思う	どちらかといえば、そう思わない	そう思わない	無回答	そう思う（計）	そう思わない（計）
全体		1,926	47.7	40.9	7.7	2.7	1.0	88.6	10.4
年齢別	10歳	269	50.6	39.0	5.6	2.2	2.6	89.6	7.8
	11歳	334	48.2	41.3	7.2	3.0	0.3	89.5	10.2
	12歳	312	51.3	39.4	6.7	2.6	-	90.7	9.3
	13歳	319	46.1	42.0	9.1	1.9	0.9	88.1	11.0
	14歳	339	41.0	47.5	7.4	2.9	1.2	88.5	10.3
	15歳	353	49.9	35.7	9.9	3.4	1.1	85.6	13.3

図表6-2 ボランティア活動への興味

		n	ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない	わからない	無回答	興味がある（計）	興味がない（計）
全体		1,926	19.6	34.7	20.3	13.8	10.9	0.8	54.3	34.1
年齢別	10歳	269	19.3	37.5	17.1	13.4	10.8	1.9	56.9	30.5
	11歳	334	19.5	35.6	18.3	13.2	13.2	0.3	55.1	31.4
	12歳	312	22.4	35.3	17.9	11.9	12.5	-	57.7	29.8
	13歳	319	15.7	35.1	24.5	13.8	10.7	0.3	50.8	38.2
	14歳	339	16.8	33.9	21.8	14.7	11.5	1.2	50.7	36.6
	15歳	353	23.5	31.4	21.5	15.3	7.1	1.1	55.0	36.8

小中学校では、コロナ禍にあって、職場見学や職場体験活動などが実施できていない。先の調査においても、90%の中学校で職場体験活動を実施しなかった（今後も実施しない）と回答しており、令和3年度においてもほぼ同様の状況であると推定される。

小学校学習指導要領解説特別活動編においては、学校行事の活動である勤労生産・奉仕的活動のねらいとして、「勤労の尊さや生産の喜びを体得するとともに、ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるようにすること」と示され、また同中学校特別活動編における勤労生産・奉仕的活動のねらいとして、「勤労の尊さや生産の喜びを体得し、職場体験活動などの勤労観・職業観に関わる啓発的な体験が得られるようにするとともに、共に助け合って生きることの喜びを体得し、ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験が得られるようにすること」と示されている。このことから、コロナ禍という社会の現状の回復を期待し、こうした活動の再開が早期に実現することを望みつつ、各学校において現状にあっても工夫しながら教育活動を展開していくことが重要であると考えられる。

7 将来像

将来への希望について、「自分の将来について明るい希望をもっていますか」の問いに対して、70%台～90%台の児童生徒が肯定的な回答をしている。年齢が上がるにつれて肯定的な回答が低くなっており、また、男性よりも女性の方が比較的高い傾向が示されている。中学生の年齢層では、約20%の生徒が否定的な回答をしている（図表7-1）。

この背景として、「プロ野球選手になりたい」など、小学生の時に描く将来の夢が、中学生になって自己理解を深め、自己や社会の現実と向き合うことで、その希望が変化していくという場合も少なくないだろう。

図表7-1 将来への希望

		n	希望がある	どちらかといえば希望がある	どちらかといえば希望がない	希望がない	無回答	希望がある (計)	希望がない (計)
全体		1,926	42.6	39.1	12.9	4.4	1.0	81.7	17.3
年齢別	10歳	269	54.3	35.7	5.2	3.0	1.9	90.0	8.2
	11歳	334	46.4	36.2	11.7	5.4	0.3	82.6	17.1
	12歳	312	48.1	36.5	11.5	3.8	-	84.6	15.4
	13歳	319	36.4	44.5	14.1	4.1	0.9	80.9	18.2
	14歳	339	32.7	43.1	17.1	5.3	1.8	75.8	22.4
	15歳	353	40.2	38.0	16.1	4.2	1.4	78.2	20.4

また、ポスト青年期の自己像として（図表7-2）、「あなたが大人になったとき、どのようになっていると思いますか」の問いに、「お金持ちになっている」については約半数、「自由にのんびり暮らしている」についてはおおむね2～3割、「世界で活躍している」については7～8割、「多くの人の役に立っている」については3～4割、「有名になっている」については6～8割、「子供を育てている」については2～3割、「結婚している」については約3割、「出世している」については3～5割、「外国に住んでいる」については約8割の児童生徒が否定的な回答をしており、将来の自己像として具体的な夢や希望がもちにくい状況があるのではないかと推測される。

一方で、「親を大切にしている」、「幸せになっている」については約9割の児童生徒が肯定的な回答をしており、家族とともに幸せになりたいと願う気持ちが示されているのではないかと感じる。児童生徒には、自己を生かし、自己の可能性を見出し、将来への夢や希望をもてるような態度を、学習や生活を通して身に付けさせたい。

図表7-2 ポスト青年期の自己像

ア) お金持ちになっている

		n	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う (計)	そう思わない (計)
全体		1,926	14.2	33.3	37.3	14.0	1.2	47.5	51.3
年齢別	10歳	269	17.1	36.8	32.3	12.6	1.1	53.9	45.0
	11歳	334	11.4	34.7	32.9	19.2	1.8	46.1	52.1
	12歳	312	12.2	34.9	36.2	15.7	1.0	47.1	51.9
	13歳	319	13.8	30.7	40.1	14.7	0.6	44.5	54.9
	14歳	339	14.5	28.0	44.8	11.8	0.9	42.5	56.6
	15歳	353	16.4	35.1	36.5	9.9	2.0	51.6	46.5

図表 7-2 ポスト青年期の自己像・つづき

イ) 自由にのんびり暮らしている

(%)

	n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)	
全体	1,926	38.9	37.9	15.8	6.3	1.0	76.8	22.2	
年齢別	10歳	269	41.6	26.0	20.4	10.4	1.5	67.7	30.9
	11歳	334	38.9	35.9	18.0	5.4	1.8	74.9	23.4
	12歳	312	40.7	40.7	10.9	7.4	0.3	81.4	18.3
	13歳	319	41.1	37.3	14.4	6.6	0.6	78.4	21.0
	14歳	339	35.4	42.2	15.9	6.2	0.3	77.6	22.1
	15歳	353	36.5	42.8	15.9	3.1	1.7	79.3	19.0

ウ) 世界で活躍している

(%)

	n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)	
全体	1,926	10.7	12.8	31.6	43.2	1.7	23.5	74.8	
年齢別	10歳	269	13.4	15.6	29.7	39.0	2.2	29.0	68.8
	11歳	334	10.5	13.5	28.4	45.5	2.1	24.0	74.0
	12歳	312	10.3	15.1	32.1	41.3	1.3	25.3	73.4
	13歳	319	8.2	9.7	35.7	45.5	0.9	17.9	81.2
	14歳	339	8.3	11.5	32.4	46.9	0.9	19.8	79.4
	15歳	353	14.2	11.9	31.2	40.2	2.5	26.1	71.4

エ) 多くの人の役に立っている

(%)

	n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)	
全体	1,926	21.8	37.8	26.9	12.0	1.5	59.6	38.9	
年齢別	10歳	269	26.0	36.4	24.5	11.5	1.5	62.5	36.1
	11歳	334	21.6	36.5	27.8	11.7	2.4	58.1	39.5
	12歳	312	23.1	34.6	26.9	14.4	1.0	57.7	41.3
	13歳	319	21.6	36.7	27.9	12.5	1.3	58.3	40.4
	14歳	339	16.2	41.9	28.6	12.4	0.9	58.1	41.0
	15歳	353	22.9	39.9	25.2	9.9	2.0	62.9	35.1

オ) 有名になっている

(%)

	n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)	
全体	1,926	10.2	13.6	31.1	43.6	1.6	23.8	74.7	
年齢別	10歳	269	14.1	20.1	27.5	36.4	1.9	34.2	63.9
	11歳	334	9.3	12.6	29.9	46.1	2.1	21.9	76.0
	12歳	312	9.0	15.1	35.6	39.1	1.3	24.0	74.7
	13歳	319	7.5	12.5	31.3	47.6	0.9	20.1	79.0
	14歳	339	9.4	10.6	33.6	45.4	0.9	20.1	79.1
	15歳	353	12.5	11.9	28.3	45.0	2.3	24.4	73.4

カ) 子どもを育てている

(%)

	n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)	
全体	1,926	30.1	37.0	18.2	13.0	1.8	67.0	31.2	
年齢別	10歳	269	40.5	33.8	12.3	10.8	2.6	74.3	23.0
	11歳	334	35.6	34.4	15.9	11.7	2.4	70.1	27.5
	12歳	312	30.4	35.9	22.1	10.3	1.3	66.3	32.4
	13歳	319	22.3	40.4	19.4	16.6	1.3	62.7	36.1
	14歳	339	24.2	39.5	18.6	16.8	0.9	63.7	35.4
	15歳	353	29.2	37.1	19.8	11.6	2.3	66.3	31.4

図表 7-2 ポスト青年期の自己像・つづき

キ) 親を大切にしている

(%)

		n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全体		1,926	62.3	30.9	4.0	1.8	1.1	93.1	5.8
年齢別	10歳	269	74.7	21.2	2.2	1.1	0.7	95.9	3.3
	11歳	334	66.2	28.1	3.3	0.9	1.5	94.3	4.2
	12歳	312	66.0	27.2	3.2	2.6	1.0	93.3	5.8
	13歳	319	57.7	35.4	4.1	1.6	1.3	93.1	5.6
	14歳	339	56.9	34.8	5.3	2.1	0.9	91.7	7.4
	15歳	353	55.0	36.3	5.4	2.3	1.1	91.2	7.6

ク) 幸せになっている

(%)

		n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全体		1,926	57.0	33.0	6.7	2.1	1.2	89.9	8.9
年齢別	10歳	269	66.5	26.4	3.3	2.6	1.1	92.9	5.9
	11歳	334	59.6	31.7	6.0	1.2	1.5	91.3	7.2
	12歳	312	61.9	28.8	5.8	2.9	0.6	90.7	8.7
	13歳	319	52.0	36.7	8.8	1.6	0.9	88.7	10.3
	14歳	339	53.1	36.0	7.7	2.1	1.2	89.1	9.7
	15歳	353	51.0	36.5	8.2	2.5	1.7	87.5	10.8

ケ) 結婚している

(%)

		n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全体		1,926	32.1	34.8	18.3	13.1	1.7	66.9	31.4
年齢別	10歳	269	39.0	33.8	13.4	11.9	1.9	72.9	25.3
	11歳	334	34.7	35.3	12.6	14.4	3.0	70.1	26.9
	12歳	312	33.7	34.6	18.3	12.5	1.0	68.3	30.8
	13歳	319	25.1	35.7	22.9	15.0	1.3	60.8	37.9
	14歳	339	29.8	34.5	20.1	14.7	0.9	64.3	34.8
	15歳	353	31.4	34.8	21.8	9.9	2.0	66.3	31.7

コ) 出世している

(%)

		n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全体		1,926	23.1	32.7	27.0	15.4	1.9	55.8	42.4
年齢別	10歳	269	24.2	31.2	23.4	19.3	1.9	55.4	42.8
	11歳	334	19.5	27.8	31.1	19.2	2.4	47.3	50.3
	12歳	312	24.0	36.9	24.0	13.5	1.6	60.9	37.5
	13歳	319	24.8	30.1	28.8	15.0	1.3	54.9	43.9
	14歳	339	20.9	34.8	27.1	15.6	1.5	55.8	42.8
	15歳	353	25.5	34.8	26.6	10.5	2.5	60.3	37.1

サ) 外国に住んでいる

(%)

		n	そう思う	どちらかといえはそう思う	どちらかといえはそう思わない	そう思わない	無回答	そう思う(計)	そう思わない(計)
全体		1,926	5.9	6.7	21.5	64.2	1.6	12.6	85.8
年齢別	10歳	269	3.3	6.3	17.8	70.6	1.9	9.7	88.5
	11歳	334	5.7	4.2	19.2	68.3	2.7	9.9	87.4
	12歳	312	7.7	6.7	23.4	61.2	1.0	14.4	84.6
	13歳	319	5.0	5.3	21.6	66.8	1.3	10.3	88.4
	14歳	339	6.2	8.3	22.1	62.5	0.9	14.5	84.7
	15歳	353	6.8	9.3	24.4	57.5	2.0	16.1	81.9

まとめ

令和3年度 児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議の審議まとめ(案)によれば、コロナ禍にあった令和2年度において、「児童生徒の自殺者数は499人に上り、前年の自殺者数と比べて100人増加している。」と指摘している。また、児童生徒の自殺者の原因・動機として、特に多いものとして、進路に関する悩み(入試に関する悩みを除く)、学業不振、親子関係の不和であり、その他にも、病気の悩み・影響、その他友人との不和(いじめを除く)、家族からのしつけや叱責などが挙げられている。このように、様々な悩みを抱えて、その結果として死を選ぶ児童生徒が増加している現状がある。

今回の調査において、悩みや本音を話せない児童生徒の存在も明らかになった。私たちは、児童生徒の一人の命も失ってはならない、という強い信念をもって教育に当たらなければならない。特に、コロナ禍にあって人との関わりが制限されている現状にある中で、児童生徒の居場所づくりや、強くしなやかな心を育てる教育活動、学力の向上、児童生徒理解のための日々の関わりや個別の面談や相談など、学校・家庭・地域が連携して児童生徒の心に寄り添った生活環境を構築する必要がある。

小中学校の学習指導要領解説特別活動編では、特別活動の目標について、「人間関係形成」、「社会参画」、「自己実現」という3つの視点を手掛かりとして、「『様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して』資質・能力の育成を目指すこと」とされている。学校においては、こうした教育活動のより充実を目指し、児童生徒のよりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己の実現を目指し、児童生徒が夢や希望をもって豊かに育つ社会を構築したい。

参考資料

- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別活動編 平成29年7月 文部科学省
- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説特別活動編 平成29年7月 文部科学省
- ・令和2年度東京都中学校特別活動研究会研究紀要第53号 令和3年3月
- ・令和3年度全日本中学校長会調査研究報告書 令和4年2月
- ・令和3年度 児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議 審議のまとめ(案)令和3年

3．子供・若者の自己肯定感・孤独感とソーシャル・ネットワークとの繋がり

奈良女子大学研究院生活環境科学系 教授 伊藤美奈子

1．前思春期から思春期へ

人生の発達段階の中でも、子ども時代から大人時代への過渡期に当たるのが思春期（個人差は大きいですが、小学校高学年くらいから中学生をピークとした時期）である。身体の変化によって始まり、情緒面にもその揺れが連動して起こる時期を指す。

思春期の特徴ともいえる身体の変化が、“自分”の外側、そして内面に意識を向けさせる機会となることも多い。思春期は、自分に対する意識が強まり、自分のことを客観的に眺めたり自分を振り返ったり「自分って一体、何ものなのだろう？」という実存的な問いに心が開かれ始める時期でもある。それと同時に、他者に対する意識（他者意識）も高まる。そして、この「他者」が自分との比較対象に選ばれ、他者との比較により自分の欠点や足りない点に目が向くことも多い。こうして、人を意識し、人と比較する中で、自己評価を下げ、自己否定に陥る子どもたちも増えていく。

本稿では、この子どもから大人への過渡期にあたる不安定な時期に、自己意識や社会（他者）との繋がり意識にどのような特徴が見られるのかについて検討してみたい。

2．調査結果より

(1) 項目の尺度化と年齢別比較

まず、複数の類似した項目をまとめることを試みた。以下に示すように、自己肯定感に関する4項目と、孤独感に関する5項目について、因子分析を行ったところ、それぞれが1因子で構成されることが確認された。そこで、それぞれ4項目と5項目の内的整合性を見るために、クロンバックの係数を調べたところ、いずれも.653と.883と、ほぼ十分な値が得られた。そこで、以下の分析では、それぞれの項目得点を合計し、項目数で除した値を、＜自己肯定感（得点）＞（レンジ：1～4点）、＜孤独感（得点）＞（レンジ：1～4点）と扱うこととする。

ソーシャル・ネットワークのうち、家族・親族、友達、地域の人、インターネット上の知り合いの4者については、以下に示す各3項目で相談する・サポートされる可能性を尋ねた。各3項目について、上記同様に因子分析を行ったところ、ここでもそれぞれの1因子性が確認された。それぞれの係数を算出した結果、家族・親族との繋がり係数は.830、友達との繋がり係数は.843、地域の人との繋がり係数は.889、インターネット上の知り合いについては.944となり、十分な内的整合性も確認された。そこで、この4種についても、各3項目の得点の平均を算出し、それぞれ＜家族との繋がり＞＜友達との繋がり＞＜地域との繋がり＞＜ネット上の繋がり＞（各レンジ：1～4点）として扱う。

自己肯定感

- ・今の自分が好きだ
- ・自分は親（保護者）から愛されていると思う
- ・うまくいかかわからないことにも頑張って取り組む
- ・自分は役に立たないと強く感じる

孤独感

- ・さみしいと感じることが多い
- ・ひとりぼっちだと感じる人が多い
- ・まわりから取り残されていると感じる
- ・困った時に誰も助けてくれないと感じる
- ・自分には話せる人がいないと感じる

つながり（家族・親戚/友達/地域の人/インターネット上の知り合い）

- ・何でも悩みを相談できる人がいる
- ・困った時は助けてくれる
- ・他の人には言えない本音を話せることがある

以下、発達段階による比較を中心に見ていきたいと思うが、所属学校種が明らかではないので、年齢で3群に分けることとした。つまり、小学4年生から6年生にわたる10-11歳、小学生から中学生の両方にまたがる12-13歳、中学2年生から3年生、そして一部高校1年生も含む14-15歳という3群に区分し、この3群間での比較を行った。

各得点の群ごとの平均・標準偏差と、年齢による群間差の検定を分散分析で行い、さらにどこに差があるかについて多重比較で検討した（表1）。

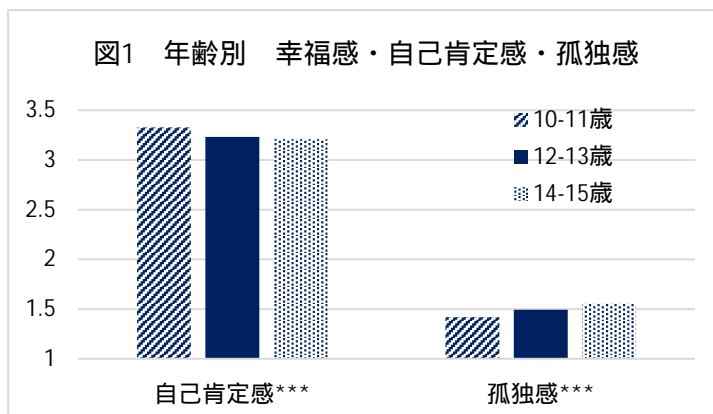
まず、＜自己肯定感＞については、全体的に平均点が3点台（得点のレンジは1～4点）と比較的高めであった（図1）。年齢群で比較すると、群間差が有意で（ $F(2,1904)=8.57, p<.001$ ）多重比較の結果、最も高い10-11歳群と、12歳以上の2群との間に有意な差のあることが確認された。＜孤独感＞は、全体に1点台半ばに集中し、孤独感を持つ子どもたちはそれほど多くはないことが確認された。＜孤独感＞を年齢群で比較すると、こちらも群間差が有意で（ $F(2,1885)=7.22, p<.001$ ）多重比較の結果、最も高い14-15歳群と、最も低い10-11歳群との間に有意差が見られた。

表1 ＜自己肯定感＞＜孤独感＞と＜繋がり＞4得点の年齢群別平均の比較

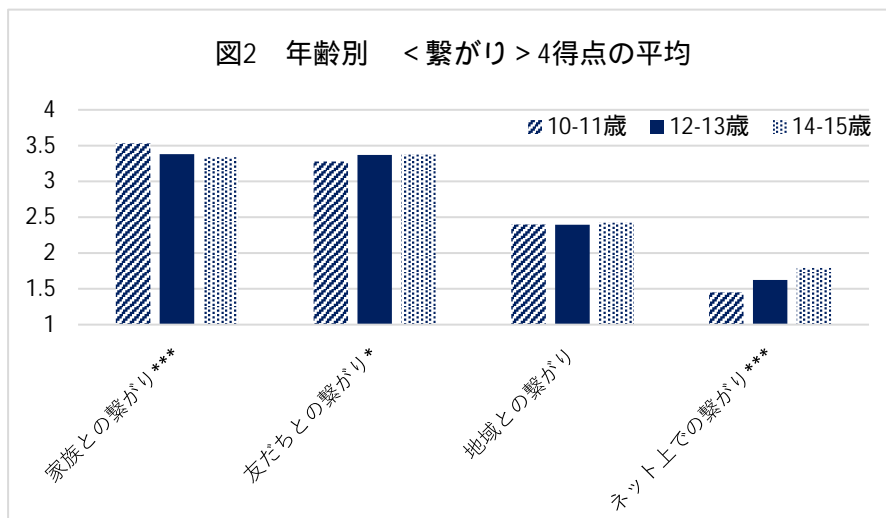
	各群の平均とS D			分散分析	
	10-11歳	12-13歳	14-15歳	F 値	多重比較
自己肯定感	3.33(.52)	3.23(.53)	3.21(.55)	8.57***	1>2,3
孤独感	1.42(.59)	1.49(.65)	1.55(.63)	7.22***	1<3
家族との繋がり	3.53(.60)	3.38(.72)	3.34(.70)	13.99***	1>2,3
友達との繋がり	3.28(.75)	3.37(.73)	3.38(.72)	3.44*	1<3
地域との繋がり	2.40(.98)	2.40(.99)	2.42(.98)	.17ns	
ネット上での繋がり	1.45(.84)	1.62(.94)	1.79(1.03)	19.73***	1<2<3

*** p<.001 * p<.05

多重比較の1 = 10-11歳群、2 = 12-13歳群、3 = 14-15歳群を意味する。



繋がり4得点については、全体的に、＜家族との繋がり＞と＜友達との繋がり＞は高く、＜ネット上の繋がり＞は低く、＜地域との繋がり＞はその中間に位置することがわかった(図2)。年齢群間差については、＜地域との繋がり＞以外で有意な差が見出された。まず、＜家族との繋がり＞は年齢群間差が大きく ($F(2,1908)=13.99, p<.001$) 最も高い10-11歳群と、12歳以上の2群との間に有意な差のあることが確認された。＜友達との繋がり＞も年齢群間差は有意で ($F(2,1910)=3.44, p<.05$) 多重比較の結果、最も高い14-15歳群と、最も低い10-11歳群との間に有意差が見られた。さらに＜ネット上の繋がり＞についても年齢による差が大きく ($F(2,1831)=19.73, p<.001$) 多重比較の結果、10-11歳群<12-13歳群<14-15歳群と、年齢とともに高まることがわかった。



以上より、小学校高学年から中学卒業前後にかけての全体的な傾向としては、自己肯定感が高く孤独感は低めであり、家族や友達との関係に支えられる一方で、地域やネット上とのつながりはそれほど強くないという点で、比較的健全な特徴を示している点が確認された。一方、3つの年齢群の比較からは、小学生では自己肯定感が高いが、中学に入るところから低下していくこと、一方、孤独感は年齢とともに高まっていくことが明らかになった。これは、鬱傾向や自己嫌悪感が高まる思春期・青年期の特徴とも合致している。

また、ソーシャル・ネットワークについては、小学生では家族との繋がり強い一方で、中学生に入るところから家族とは疎遠になり始め、それとは対照的に、年齢とともに強まるのが友達との関係である。地域との繋がり、全般的に強くないが、年齢にかかわらず緩やかに継続していることがわか

る。他方、年齢差が大きかった（年齢とともに強くなる）ものとしてネット上の繋がりがあある。スマホやタブレットの所持率は小学生の段階でも相当に高まっているが、中学になるとその活用の幅も広がり、ネット上でのつながりが深まるが、今回の結果はそうした発達段階の特徴が反映されたものと考えられる。

(2) 自己肯定感・孤独感とソーシャル・ネットワークとのつながりの相互相関 (表2)

まず、<自己肯定感>と<孤独感>とは、負の相関が有意であった(表2の 部分)。自己肯定感が高いほど孤独感は低いという関係にあることがわかる。また、ソーシャル・ネットワーク4得点間の相互相関(表2の 部分)は、<家族との繋がり><友達との繋がり><地域との繋がり>は相互に正の相関が有意であったが、<ネット上の繋がり>については<地域との繋がり>とは弱い正の相関が見られた一方で、<ネット上の繋がり>と<家族との繋がり><友達との繋がり>とはほとんど関連がないことがわかった。ネットでの関係性は、ほかの身近な他者との繋がりである三者とは異質であると考えられる。

これら4つの繋がり得点と<自己肯定感>とは、<家族との繋がり><友達との繋がり>とは正の相関があったが、<地域との繋がり>とはやや弱い正の相関となり、<ネット上の繋がり>との間にはほとんど相関が見られなかった。これに対し、<孤独感>との関連を見ると、<自己肯定感>とは逆に、<家族との繋がり><友達との繋がり>とは負の相関、<地域との繋がり>とは弱い負の相関が見られたが、<ネット上の繋がり>との間にはごく弱い正の相関が認められた(表2の 部分)。これより、家族や友達、地域の人とのつながりの強さは、自己肯定感の高さ、および孤独感の低さと関連する可能性があるが、ネット上の繋がりについては、弱いながらも、むしろ孤独感の高さと関連がある。以上より、ネットにつながりを求める子どもたちの中には、ほかの身近な人との関係が希薄で、孤独感を抱えた状態にある子どもが多いことが推測できる。

表2 <自己肯定感><孤独感>と<繋がり>4得点の相互相関

	自己肯定感	孤独感	家族との繋がり	友達との繋がり	地域との繋がり
孤独感					

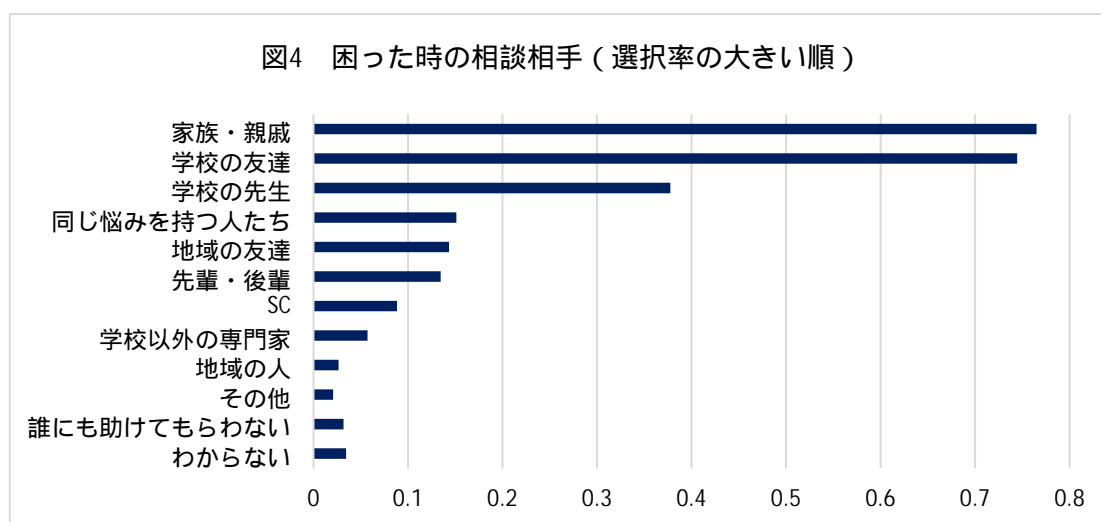
表3 <自己肯定感> <孤独感>を従属変数、4つの<繋がり>得点を
独立変数とした重回帰分析

説明変数	従属変数 ()	
	自己肯定感	孤独感
家族との繋がり	.326***	-.317***
友達との繋がり	.117***	-.264***
地域との繋がり	.105***	-.056*
ネット上の繋がり	.003	.139***
R^2	.193***	.281***

*** $p < .001$

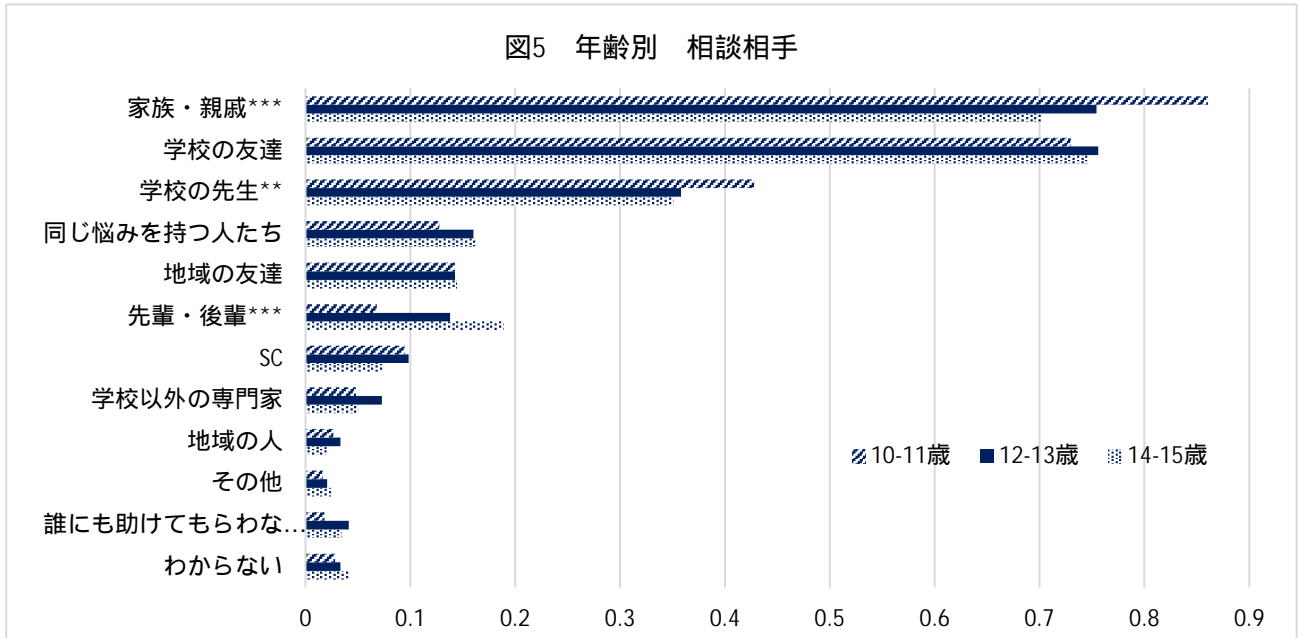
(3) 落ち込んだ時の相談相手

子どもたちが落ち込んだときの相談相手として、12の選択肢から複数回答で選ぶよう求めたところ、「家族・親戚」「学校の友達」については、76.9%と74.5%の選択率が示され、7割を超える子どもたちがこの二者を選択したことがわかる。続いて多かったのは「学校の先生」の37.7%であった。それに続くのは「同じ悩みを持つ人たち(15.1%)」「地域の友達(14.3%)」「先輩・後輩(13.4%)」の3つで、1割から2割の子どもたちが選択していた。一方、「スクールカウンセラー(8.8%)」や「学校以外の専門家(5.7%)」などの専門職、そして「地域の人(2.6%)」については1割を切る選択率であることがわかった。他方、「誰にも助けてもらわない」を選んだ生徒が3.2%、「わからない」についても3.5%であった。ごく少数とはいえ、困っても誰にも相談できない子どもの存在が明らかになった。



次に、相談相手を年齢群別に算出し、群間差を χ^2 検定した結果を図5に示す。年齢群間差が大きくみられたのは「家族・親戚」で($\chi^2(3)=46.62, p < .001$)、年齢が上がるほどに選択率は低下し、14-15歳群では70.2%となり、この年齢群で最も多かった「学校の友達(74.7%)」よりも選択率は低くなった。「学校の友達」は10-13歳では「家族・親戚」に次いで2番目の多さであったが、14-15歳では最も高い選択率であった($\chi^2(3)=9.56, p < .01$)。「学校の先生」は、どの年齢群も3番目となり、3群間で共通していたが、4割を超えた10-11歳群(42.8%)に比して、12-13歳では35.8%、14-15歳では35.1%と4割を切っていた。年齢とともに家族や先生という大人への相談が減少し、同世代の友達に移行していく子どもの割合が増えていくことがわかる。

それ以外に年齢群間差が大きかったのは「先輩・後輩」で ($\chi^2(3)=40.49, p<.001$)、10-11 歳群は 6.8% だったのに対し、12-13 歳群では 13.8%、14-15 歳群では 18.9% と増え、「地元の友達(14.5%)」や「同じ悩みを持つ人たち (16.3%)」よりも多かった。これは、中学校で部活動が始まり、そこでの先輩・後輩関係が相談相手に選ばれることが増えるためであると考えられる。さらに、有意な差ではないが「誰にも助けてもらわない」も差の傾向があり ($\chi^2(3)=5.62, p<.1$)、10-11 歳群では 1.8% とごく少数であるのに対し、12-13 歳では 4.1%、14-15 歳では 3.5% とわずかではあるが増えていた。



この相談相手として選ばれた選択肢の数(合計)を、年齢群で比較したのが図6で、年齢群間は無意味ではなく、多くの子どもたちが2~3種類の相談相手を有していることがわかる。ところが、選択された選択肢の比率の差を比較したところ(表4)、どの年齢群も「2人」が最も多く選択されたが、年齢群で比率に有意な差が見られた($\chi^2(12)=22.36, p<.001$)。相談相手が「0人(0種類)」「1人(1種類)」だったのは、年齢とともに増えており(表4の囲み部分)、年齢が上がるほどに相談相手が限定されたりいなくなる率が高まる結果となった。

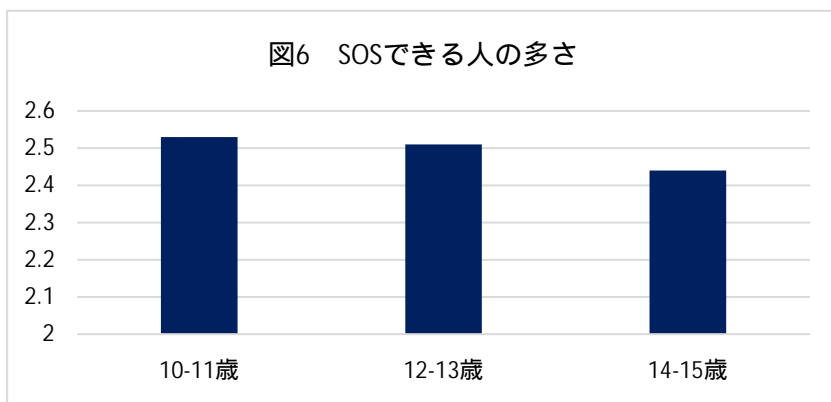


表4 相談できる人の種類数(年齢群別人数と群内%)

	0人	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	
10-11歳	34 (5.6)	99 (16.4)	187 (31.0)	157 (26.0)	83 (13.8)	21 (3.5)	22 (3.7)	603
12-13歳	48 (7.6)	115 (18.2)	185 (29.3)	146 (23.1)	81 (12.8)	27 (4.3)	29 (4.6)	631
14-15歳	65 (9.4)	127 (18.4)	192 (27.8)	144 (20.8)	102 (14.7)	44 (6.4)	44 (2.6)	682

$\chi^2(12)=22.36, p<.001$

次に、相談相手の種類の多さと、＜自己肯定感＞＜孤独感＞と、4つのソーシャル・ネットワークとの繋がり得点との相関を見たところ(表5)＜自己肯定感＞とは弱い正、＜孤独感＞とは弱い負の相関が有意で、＜家族との繋がり＞＜友達との繋がり＞＜地域との繋がり＞は、弱い正の相関が有意であった。唯一＜ネット上の繋がり＞とは相関がないことが示された。自己肯定感が高い子どもほど相談相手も多く、孤独感が強い子どもほど相談できる相手は少なくなるといえる。また、家族や友達や地域との繋がりが多いほど、相談できる相手の種類も増えるが、ネット上の繋がりがいくら強くなっても、相談できる相手が多様に広がるわけではないことが示された。

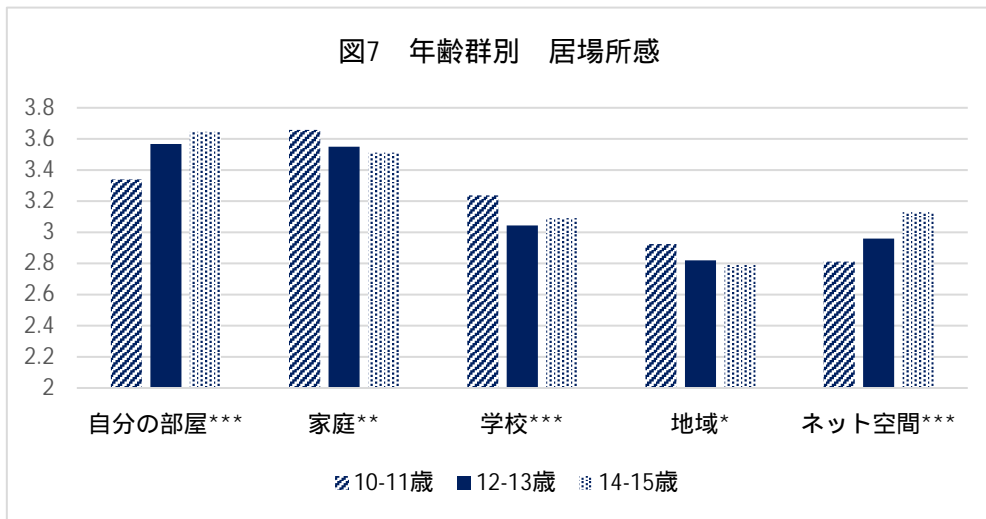
表5 相談できる人の種類数と各得点の相関

自己肯定感	孤独感	家族との 繋がり	友達と の繋がり	地域との 繋がり	ネット上 の繋がり
.273***	-.244***	.353***	.365***	.301***	.032

*** $p<.001$

(4) 居場所の年齢群間比較

5つの選択肢(自分の部屋・家庭・学校・地域・ネット空間)について、年齢群別に居場所と感じる強さ(1~4点)を比較したところ、5つすべてに群間差が有意であった。「自分の部屋」は、最も低い10-11歳群と、12歳以上の2群との間に有意差が見られた($F(2,1837)=20.61, p<.001$)。「家庭」については「自分の部屋」と対称的な差が見られ、最も高い10-11歳群と、最も低い14-15歳群との差が有意であった($F(2,1923)=5.47, p<.01$)。「学校」は、最も高い10-11歳群と、12歳以上の2群との間に有意差が見られた($F(2,1873)=7.16, p<.001$)。「地域」は「家庭」同様の差が見られ、最も高い10-11歳群と、最も低い14-15歳群との差が有意であった($F(2,1879)=3.21, p<.05$)。年齢群間差が一番大きかったのが「ネット空間」で($F(2,1877)=14.82, p<.001$)、10-11歳群<12-13歳群<14-15歳群と、年齢の高まりとともに居場所感も高まった。年齢群内での順位(1~5位)を見ると、10-11歳群では、順に「家庭」「自分の部屋」「学校」「地域」「ネット空間」、12-13歳群では「自分の部屋」「家庭」「学校」「ネット空間」「地域」、14-15歳群では「自分の部屋」「家庭」「ネット空間」「学校」「地域」となり、年齢とともに、自分の部屋やネット空間という“一人になれる場所”への居場所感が強まり、身近な他者とのつながりを含む学校や地域の位置づけは、年齢が上がるとともに相対的に低下していくことが明らかになった。



これら居場所感と＜自己肯定感＞＜孤独感＞との相関について、年齢群別に求めたところ(表6)年齢群での相関傾向の違いはほとんど見られなかったため、全体を込みにして相関を見たのが表6である。「家庭」「学校」「地域」における居場所感と＜自己肯定感＞＜孤独感＞とは、前者が正、後者が負の相関が有意であった一方で、「自分の部屋」と「ネット空間」については、相関はほとんど見られなかった。学校や家庭、地域に居場所感を抱いているほど自己肯定感が高まり、孤独感は低下する傾向にあるが、自分の部屋やネット空間という“一人になれる場所”に居場所感を持っていても、それは自己肯定感や孤独感のような適応指標にはつながりにくいことが示唆された。

表6 ＜自己肯定感＞＜孤独感＞と居場所感との相関

	自分の部屋	家庭	学校	地域	ネット空間
自己肯定感	.108***	.306***	.405***	.304***	-.077***
孤独感	-.098***	-.361***	-.418***	-.227***	.64**

*** $p < .001$ ** $p < .01$

(5) 繋がり4得点によるクラスタ分析より

4つの繋がりの方により、いくつかのグループに分けるために、繋がり4得点を用いてWard法によるクラスタ分析を行い、3つのクラスタを得た。第1クラスタは510人、第2クラスタは838人、第3クラスタは472人が分類された。人数比の偏りを見るため²検定を行ったところ、偏りは有意であった($\chi^2(2)=133.51, p < .001$)。

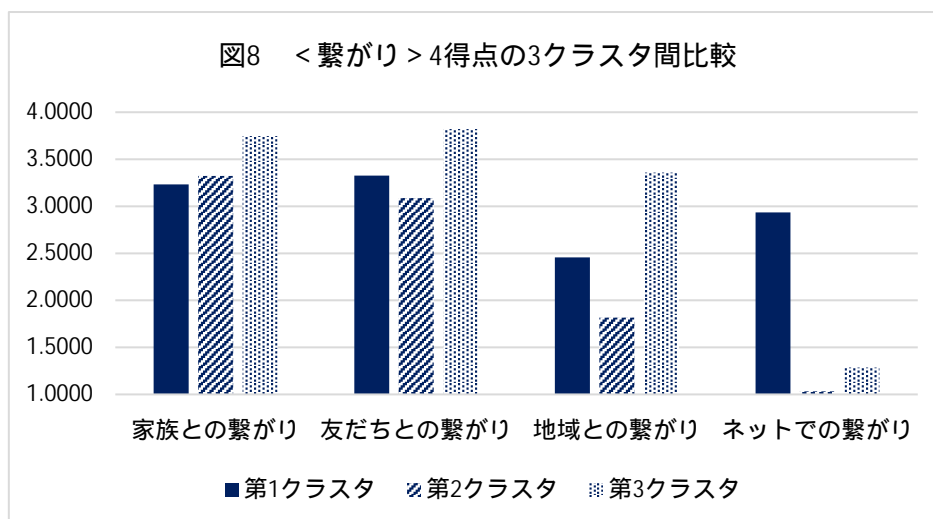
次に、得られた3クラスタを独立変数、＜家族との繋がり＞＜友達との繋がり＞＜地域との繋がり＞＜ネット上の繋がり＞を従属変数として分散分析を行った(表7)。その結果、4得点ともクラスタ間の差が有意であることが明らかになった(＜家族との繋がり＞:($F(2, 1817)=89.20, p < .001$); ＜友達との繋がり＞:($F(2, 1817)=180.73, p < .001$); ＜地域との繋がり＞:($F(2, 1817)=639.66, p < .001$); ＜ネット上の繋がり＞:($F(2, 1817)=2621.98, p < .001$)。3クラスタの結果を図8に示すと同時に、Tukey法による多重比較の結果を表7に示す。第1クラスタは、＜家族の繋がり＞は低く、＜友達との繋がり＞と＜地域との繋がり＞は中程度、＜ネット上の繋がり＞は最も高い。第2クラスタは＜友達との繋がり＞＜地域との繋がり＞＜ネット上の繋がり＞がすべて3クラスタ中で最も低い。第3クラスタは＜ネット上の繋がり＞以外の身近な人との繋がりが高いという特徴が見られた。

表7 3つのクラスターの<自己肯定感> <孤独感>

	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	分散	分析
				F値	多重比較
家族との繋がり	3.23(.76)	3.32(.68)	3.75(.44)	89.21***	1<2<3
友達との繋がり	3.33(.73)	3.09(.77)	3.82(.33)	180.73***	2<1<3
地域との繋がり	2.46(.96)	1.82(.70)	3.36(.55)	639.66***	2<1<3
ネット上の繋がり	2.46(.77)	1.82(.13)	3.36(.48)	2621.98***	2<1<3

*** $p<.001$

多重比較の1=第1クラスター、2=第2クラスター、3=第3クラスターを意味する



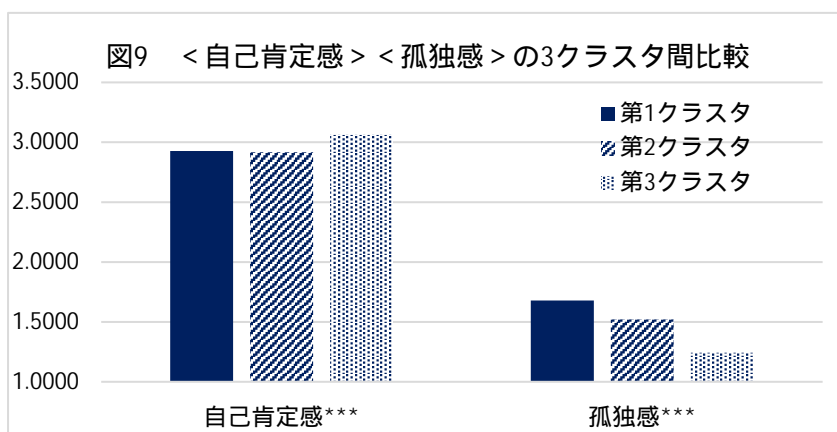
これら3クラスターの<自己肯定感>と<孤独感>を調べたところ表8のような結果となり、いずれも3群の差が有意であった(<自己肯定感> : ($F(2,1804)=24.45, p<.001$) ; <孤独感> : ($F(2,1789)=63.08, p<.001$))。多重比較の結果、<自己肯定感>は最も高い第3クラスターと、第1・第2クラスターとの間に有意な差が見られた。<孤独感>は第1クラスターが最も高く、それに続く第2クラスター、最も低い第3クラスターの差がすべて有意であった。家族よりネットや地域の繋がりを求める第1クラスターは、自己肯定感はやや低めで孤独感が強い。身近な友達や地域との繋がりも低いネット上にも結びついていない第2クラスターは、自己肯定感はやや低めであったが、孤独感はやや低くない。身近な人との繋がりが強い第3クラスターは自己肯定感が高く孤独感が低いという点で、3つの中では最も健全な状態にあることがわかった。

表8 3つのクラスターの<自己肯定感> <孤独感>

	第1クラスター	第2クラスター	第3クラスター	分散分析	
				F値	多重比較
自己肯定感	2.93(.42)	2.92(.38)	3.06(.33)	24.45***	1,2<3
孤独感	1.68(.71)	1.52(.63)	1.24(.43)	63.08***	1>2>3

*** $p<.001$

多重比較の1=第1クラスター、2=第2クラスター、3=第3クラスターを意味する



3.まとめ

以上のように、今回対象となった子どもたちは、全体的な特徴として、自己肯定感が高め、かつ孤独感は低めであることに加え、家庭・学校との繋がりは強く、地域とも関係を持ち、相談相手も複数確保している子どもたちが多いという点で、健全な特徴を有していることがうかがえた。しかし、10歳から15歳を2歳区分に分け比較したところ、年齢が高まるとともに、上記の健全な傾向に揺らぎが見られることが確認できた。これは中学生を中心とした思春期という発達段階の特徴とも重なり、子どもを取り巻く周りの大人にも注意と配慮が必要な時期であるといえる。

さらに、ソーシャル・ネットワークとして「家族」「学校」「地域」「ネット空間」に注目したところ、家族や学校・地域社会にしっかりと絆を築けている子どもたちは、自己肯定感や孤独感という意識レベルでも比較的健康度は高いが、ネット空間に頼りがちな子どもたちは、現実の他者との関係が結びにくく、孤独感の強さや自己肯定感の低さという点で特徴が見られた。この結果は、“ネットとのつながりが多い子どもたちがリスクを抱えやすい”とも解釈できるが、一方で、“自己肯定感が低く孤独であるにもかかわらず、実際の身近な大人に相談をすることができない子どもたちでも、ネット上では相談をしたり掘り所を見つけたりすることができる”とも解釈し得る。こうした子どもたちに対し、ネット上でのつながりを否定してしまうのではなく、ネット上での関係をいかにして現実世界での関係に移行していけるかという側面からの支援が、これからの社会においては必要な課題であると考えられる。さらに、年齢とともに、家族（家庭）や友人（学校）より、自分の部屋やネット上という“個になれる空間”を居場所とする割合が増える一方で、家族や友人、地域という身近な人との関係からの離脱は、自己肯定感の低下や強い孤独感にもつながり得る。“個”に志向する傾向が強まっている現代社会であるが、それが身近な人との関係から断絶された“孤”にならないような支援が求められる。

4. 子どもの居場所づくりについて

久留米大学文学部教授 門田光司

1. 本調査結果について

ユニセフ(unicef)の「イノチェンティ レポートカード 16 子どもたちに影響する世界 先進国の子どもの幸福度を形成するものは何か」(2020年9月刊行)では、日本の子どもの精神的幸福度は38か国中37位で最下位に近い結果でした。精神的幸福度については、ポジティブな面の指標として生活満足度、ネガティブな指標として自殺率が使われています。しかし、日本の子供たちは生活満足度が高くなく、また自殺率も平均より高いため、精神的幸福度が低いランキングとなったのです。また、この報告では、日本の子供たちは困った時に頼れる人がいると答えた人の割合が最も低い国の一つであるとも報告しています。これらの結果から、日本へのメッセージとして、子どもや若者へのメンタルヘルスのサービスの提供を真剣に考えなくてはならないと指摘しています。

以上のユニセフの報告を踏まえて本調査結果をみると、「あなたは、今、自分が幸せだと思いますか」の質問には、「そう思う」が93.6%、「そう思わない」が5.9%で、幸福感の高率が見られました。この高率の幸福感をもたらしている要因としては、「自分は親(保護者)から愛されていると思うか」の質問で「そう思う」が96.5%であることと比例していると推測されます。この調査結果は、ユニセフ報告の指摘に対しての朗報といえます。

次に、「こまったときに助けてくれる」の質問で「そう思う」の回答では、「家族・親せき」が96.0%、「学校で出会った友だち」が93.8%、「地域の人」が65.6%、「インターネット上における人やグループ」が21.0%でした。この調査結果でもユニセフ報告とは異なり、親・親戚、学校で出会った友だちなど、困ったときに頼れる人がいることが高率であることが示されています。

さらに、居場所についての本調査結果ですが、「今のあなたにとって居場所(ほっとできる場所、安心できる場所)になっていますか」の質問では、「自分の部屋」が85.6%、「家庭」92.2%、「学校」76.6%、「地域」66.5%、「インターネット空間」69.4%で、「家庭」が居場所となっている回答が高率でした。そして、「いずれも居場所になっていない」の回答は0.3%でした。「家庭」が居場所になっている回答の高率は、「親(保護者)から愛されていると思う」の96.5%の高率とも関係するといえるかもしれません。

なお、居場所の選択回答を小学生群(10歳~12歳)と中学生群(13歳~15歳)の比較でみると、表1に示すように中学生群は小学生群よりも自分の部屋やインターネット空間を居場所として高く回答しています。また、「いずれも居場所でない」の回答は中学生群のみでした。そして、多くの小・中学生群は孤独感等の質問については「そう思わない」の回答結果でしたが、表2に示すように「そう思う」の回答結果では、中学生群の方が小学生群よりも孤独感等の回答が多くなります。

表1. 居場所の選択回答比率

	自分の部屋	家庭	学校	地域	インターネット空間
小学生群	80.7%	93.5%	79.0%	69.1%	63.8%
中学生群	90.0%	91.0%	74.2%	64.6%	74.3%

表2. 各質問に「そう思う」との回答比率

	さびしいと 感じるこ とが多い	ひとりぼっちだ と感じる ことが多い	取り残されてい ると感じる	こまったとき に、だれも助け てくれないと感 じる	自分には話せる 人がいないと感 じる
小学生群	16.3%	11.9%	10.8%	6.0%	4.7%
中学生群	19.7%	14.4%	13.6%	7.3%	7.9%

この小学生群と中学生群の回答比率の差は、発達特性差もあるかもしれませんが。中学生群の思春期は、第二性徴や第二反抗期、友人関係の発達、容姿・異性への関心等、発達の質的变化をきたす年齢でもあります。

このように、年齢とともに自分の部屋やインターネット空間が居場所となり、孤独感を感じる子どもたちがいることも無視できません。そこで、子どもの居場所づくりに焦点をあてて述べていくことにします。

2. 「居場所」の用語について

「居場所」の定義では、広辞苑（第六版 2008）では「いるところ。いどころ」となっています。居場所の用語の使用背景として、中嶋・廣出・小長井（2007）は、居場所に関する新聞記事の登場回数が増加した 1990 年代に不登校に関する記事も増加し、居場所という言葉の使用と不登校問題との関わりがあるとしています。不登校問題は 1980 年代より顕在化し、子どもたちにとって学校以外の居場所としてフリースペースやフリースクールが注目されていくこととなります。

その後、居場所の用語は広く使用されるようになり、今日では、不登校だけではなく、乳幼児から高齢者まで幅広い世代にまで広がり（七星, 2019）居場所の機能として「心」「安定」「安心」「やすらぎ」といった言葉が含まれるようになります（中嶋・廣出・小長井, 2007）。内閣府では、子供の居場所を「家でもなく学校でもなく居場所と思えるような場所」と定義しています。

3. 国及び地方公共団体による子どもの居場所づくりの取組み

子どもの居場所づくりがクローズアップされてきたのは、2002 年度から学校五日制の完全実施や地域における子どもが犠牲となる事件の続発などにより、放課後の子どもの安全・安心な生活が大きな課題となってきたことが背景にあります（齋藤, 2006）。

2004 年度に文部科学省は「子どもの居場所づくり新プラン」を策定し、学校の校庭や教室等に安全・安心して活動できる子どもの居場所（活動拠点）を設ける「地域子ども教室推進事業」を開始しました。

さらに 2010 年に内閣府による「子ども・若者育成支援推進法」に基づく「子ども・若者ビジョン」では、「困難を有する子ども・若者の居場所づくり」にて「非行少年の立ち直り支援」「要保護児童の居場所づくり」「グループホーム等の居場所づくり」が掲げられました。2016 年の「子供・若者育成支援推進大綱」では、「子供の貧困問題への対応」にて「ひとり親家庭の子どもの生活の向上を図るため、放課後児童クラブ等の終了後に生活習慣の習得・学習支援、食事の提供等を行うことが可能な居場所づくりを行う自治体の取組を支援する」としています。そして、2021 年の「子供・若者育成支援推進大綱」では、「子供・若者が誰ひとり取り残されず、社会の中に安心できる多くの居場所を持ちながら成長・活躍していけるよう、支援の担い手やそのネットワークを強化しつつ取り組む」と謳われています。

このように、今日、子どもの居場所づくりはすべての子どもたちを対象としており、国が実施する子どもの居場所づくりへの支援施設（表3参照）や、地方公共団体の子どもの居場所づくりを支援する施設数も増加し（表4参照）、表5に示すように様々な支援施策が行われています。

表3. 主な支援施策の例

A) 地域子供の未来応援交付金（内閣府） ... 学習支援、生活習慣の習得支援、子ども食堂など食事の提供等を含め、地域の資源を活かした子どもの貧困対策を支援
B) 放課後等の学習支援・体験活動（文部科学省） ... 地域住民等の協力により実施する学習支援・体験活動
C) 生活保護世帯を含む生活困窮世帯の子どもへの学習・生活支援（厚生労働省） ... 生活困窮世帯の子供が主な対象
D) ひとり親家庭の子どもへの生活・学習支援事業（厚生労働省） ... ひとり親家庭の子どもが主な対象

引用：内閣府「国及び地方公共団体による「子供の居場所づくり」を支援する施策調べについて」（令和3年10月7日）より

表4. 子どもの居場所づくりを支援する施策

	計	都道府県	政令市	市区	町村
北海道・東北地方	54	6	2	26	20
関東地方	126	4	5	107	10
中部地方	92	6	1	65	20
近畿地方	89	9	11	60	9
中国・四国地方	59	17	4	30	8
九州地方	53	6	6	35	6
合計	473	48	29	323	73

引用：内閣府「国及び地方公共団体による「子供の居場所づくり」を支援する施策調べについて」（令和3年10月7日）より

表5. 地方公共団体による子どもの居場所づくりの支援施策

A) 居場所の立ち上げを補助するもの（例：福島県伊達市）
B) 食費費、印刷費など運営費を補助するもの（例：神奈川県秦野市）
C) 「学習支援」に特化して補助するもの（例：島根県松江市）
D) 「子供食堂」に特化して補助するもの（例：大阪府茨木市）
E) 公民館や学校等の既存の施設を活用した居場所づくりを補助するもの (例：愛媛県八幡浜市)
F) 地方公共団体が、民間団体に居場所づくりの運営を委託し、実施するもの (例：岐阜県岐阜市)

引用：内閣府「国及び地方公共団体による「子供の居場所づくり」を支援する施策調べについて」（令和3年10月7日）より

4. 子どもの居場所づくりについて

1) 子どもの社会化

子どもが成長発達していく過程で習得していく技能に「社会化」があります。子どもの社会化形成では、して良いこと、悪いことの習得と、相手を思いやる心の育ちと相手への憎悪を抱く心の抑制があげられます。そして、子どもの社会化形成は、親子間や大人 - 子間の縦の社会化と子ども同士間の横の社会化があります。

縦の社会化において、幼児期からの親子間の愛着形成を基盤に、子どもは親から愛されたいという思いから親の価値観に沿った対応に応じていきます。例えば、親が人への思いやりを尊重する子どもに育てほしいという価値観であれば、子どもが人への思いやりのある発言や行動をした場合には親は褒め、思いやりのない発言や行動をした場合には親は叱責や注意をすることで、子どもは大好きな親から褒められることで幸福感を感じていきますので、親が褒める発言や行動を習得していくこととなります。この子どもの縦の社会化は、学校での教師 - 子ども間でも同様で、子どもが信頼する教師の対応には応じていくでしょう。

子どもの友人関係の発達においては、横の社会化が形成されていきます。親子間や大人 - 子間では許されていた振る舞いでも、子ども間では許されない場合があります。この横の社会形成において、子どもは遊びや喧嘩、仲間集団内でのルールなどの経験を通して対人関係能力を習得していき、大人社会へと歩いていきます。

他方、子どもの友人関係の発達では、小学校高学年から高校生年齢に向かい、遊び相手の友人から親友 信友 心友をつくっていきます。思春期の第二反抗期は親からの心理的自立の時期ですが、この心理的自立の不安を軽減していくうえで友人関係の発達が重要で、思春期には自分の悩みを親よりも友人に話すようになっていきます。

このように、子どもの成長発達過程における友人関係の発達は大人社会への歩いていくうえで重要な発達ですが、今日の実家庭環境や学校環境、社会環境は子どもの社会化形成を妨げている状況もあります。

2) 子どもの育つ環境課題

「子どもの権利条約」について、ユニセフは四つの柱を掲げています。それは、「生きる権利」(子どもたちは健康に生まれ、安全な水や十分な栄養を得て、健やかに成長する権利を持っています)、「守られる権利」(子どもたちは、あらゆる種類の差別や虐待、搾取から守られなければなりません)、「育つ権利」(子どもたちは教育を受ける権利を持っています。また、休んだり遊んだりすること、様々な情報を得、自分の考えや信じる事が守られることも、自分らしく成長するためにとっても重要です)、「参加する権利」(子どもたちは、自分に関係のある事柄について自由に意見を表したり、集まってグループを作ったり、活動することができます。そのときには、家族や地域社会の一員としてルールを守って行動する義務があります)です。しかし、今日、これらの子どもたちの権利が保障されているのでしょうか。

「生きる権利」「守られる権利」の課題では、児童虐待件数は増加傾向にあり、令和2年度の児童相談所での児童虐待相談対応件数は 205,044 件で、過去最多となっています。また、子どもの自殺は、令和2年度は 415 人で、1974 年の調査開始以来、最多となりました。内訳では小学生が 7 人、中学生が 103 人、高校生が 305 人でした。SNS に起因する事犯の被害児童数も令和2年度は 1,819 人で増加傾向にあります。

そして、「育つ権利」の課題では、不登校数の増加があげられます。令和2年度の不登校児童生徒数は小学校で63,350人(100人に1人)、中学校で132,777人(24人に1人)、合計196,127人です。この令和2年度の小・中学校の不登校児童生徒数も過去最多となっています。

また、子どもの貧困は子どもの学力や健康、成長発達、将来への進路にも影響を及ぼします。阿部・埋橋・矢野の「大阪子ども調査」(2014年)では、親が子どもを病院に連れて行った方がよいと思いながら受診させなかったケースが1,200人あまりで、このうちの128人は「医療費の自己負担金を支払えない」という理由で受診を控えていました。また、大学それ以上の教育を子どもに受けさせたいかの質問では、中学2年生の子どもの保護者において貧困層の保護者の52%が、経済的に受けさせられないと回答しています。この調査結果から、生まれた家庭環境によって、将来、高等教育が受けられるかどうかが決まってしまうのは、社会的に不公平・不平等(社会不正義)なことです。

さらに、ヤングケアラー問題では、国の調査結果では、「世話をしている家族がいる」という生徒の割合は中学生が5.7%(およそ17人に1人)、全日制の高校の生徒が4.1%(およそ24人に1人)でした。その内容は、食事の準備や洗濯などの家事が多く、きょうだいを保育園に送迎したり、祖父母の介護や見守りをしたりと多岐にわたっています。そして、「やりたくてもできないこと」を複数回答で尋ねたところ、中学生では「自分の時間が取れない」が20.1%、「宿題や勉強の時間が取れない」が16%、「睡眠が十分に取れない」と「友人と遊べない」がいずれも8.5%でした。「学校に行きたくても行けない」と答えた生徒が1.6%でした。

今日、コロナ禍において、社会環境は大きな制限を強いられています。これにより子どもたちへの影響も見られます。感染予防対策に伴う学校の休校やオンライン授業などにより、子ども同士が集う機会が制限され、子どもの不安も増幅しています。例えば、国立成育医療研究センターによる「コロナ×こどもアンケート」第4回調査報告書(2021)では、小学4～6年生の15%、中学生の24%、高校生の30%が中等度以上のうつ症状の結果であったことを報告しています。このコロナ禍の社会環境において、国連・子どもの権利委員会「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に関する声明」では、子どもの権利委員会はCOVID-19パンデミックが子どもたちに及ぼす重大な身体的、情緒的および身体的影響について警告するとともに、各国に対し、子どもたちの権利を保護するよう求めました。そして、子どもたちが休息、余暇、レクリエーションおよび文化的・芸術的活動に対する権利を享受できるようにするための、オルタナティブかつ創造的な解決策を模索することを提言しています。

このように、子どもの社会化形成に視点をおいた場合、縦の社会化での家庭・学校・社会環境課題の改善や取り組みが求められます。他方、子どもの横の社会化では、SNSやゲーム依存、遊ぶ環境の場の減少等により、子ども同士の間関係づくりの課題があります。この今日の子どもたちがおかれた環境において、子どもの社会化形成を促進していくうえで「子どもの居場所づくり」が求められる事由といえます。

3) 子どもの居場所づくり

2021年の「子供・若者育成支援推進大綱」では、「子供・若者が誰ひとり取り残されず、社会の中に安心できる多くの居場所を持ちながら成長・活躍していける」ことが掲げられています。

子どもの社会化形成の視点から子どもの居場所づくりを考えた場合、家庭環境、学校環境、地域環境での子どもの居場所づくりがあげられます。まず、家庭環境は、親子間の縦の社会化が形成される重要な環境です。そして、子どもにとって家庭が居場所となるためには、家庭環境のウェルビーイング(well-being)が求められます。今回の調査結果では、家が居場所となっているとの回答は小学生群

が 93.5%、中学生群が 91.0%で、高率回答でした。この結果は、とても望ましいといえます。しかし、5.9%の子どもたちは、家庭が居場所になっていないと回答しています。

親子間の葛藤で家庭環境が子どもの居場所となっていない場合には、子どもたちは家庭を回避し、友人の家に泊まり続けたり、深夜徘徊を繰り返したり、非行行為を行ったりするでしょう。家庭内暴力も生じるかもしれません。また、子どもの貧困やヤングケアラーといった家庭状況において、子どもたちが将来への進路に不安をもつことで、家庭が居場所となっていない場合もあります。そのため、家庭環境が子どもの居場所となっていくためには、地域や関係機関による子育て支援、子どもの貧困対策、ヤングケアラー対策などが求められます。

学校環境が子どもの居場所となっていない場合が不登校問題です。横の社会化形成において、子どもの友人関係の発達はとても重要です。しかし、友人間のトラブルやいじめなどは、子どもたちにとっては大きなストレス要因となります。また、縦の社会化での教師 - 子ども間のトラブルもストレス要因となり、学校環境が居場所でなくなってしまう。今回の調査結果では、学校が居場所となっているとの回答は小学生群が 79.0%、中学生群が 74.2%でした。しかし、小学生群の 18.2%、中学生群の 23.2%が学校は居場所となっていないと回答しています。

子どもたちが不登校となった場合、教育支援センター（適応指導教室）やフリースペース、フリースクールなどが子どもの居場所づくりとなっていますが、家庭でひきこもり状況にある子どもたちもいます。大切な事は、不登校を生み出さない学校環境です。その学校環境のキーワードが居場所なのです。良好な友人関係、信頼できる教師が学校環境にあれば、子どもたちにとって学校は居場所となり、不登校を引き起こすことはないでしょう。そして、友人間の横の社会化と教師 - 子ども間の縦の社会化を形成していくでしょう。安全・安心・魅力ある学校づくりが、学校での子どもの居場所づくりとなります。

地域における子どもの居場所づくりも求められます。今回の調査結果では、地域（図書館や公民館や公園など、現在住んでいる周辺やそこにある建物など）が居場所となっているとの回答は小学生群が 69.1%、中学生群が 64.4%でした。この質問での地域の居場所は建物があげられていますが、子どもたちの地域内での well-being としての居場所の機会を考えた場合、その一つに子ども会活動があげられます。

子ども会の目的は子どもの心身ともに健全育成を図ることですが、1964年に全国子ども会連合会が結成されます。しかし、今日、子ども会活動が衰退しています。その理由として、三宅（2014）は子どもの数の減少、子どもの多忙化（習い事やスポーツクラブ等）、町内会の非加入、組織面での役員のなり手の課題、その他を指摘していますが、子ども会活動の大半が役員（71.8%）や保護者（78.6%）が作り、子どもが作っているのは4%と非常に低いことを報告しています。子ども会活動のみならず、地域内での子ども同士が集う活動については、子どもの社会化形成を踏まえた主体的活動を重視し、子ども自身が活動プログラム作りに参画していくことが望まれます。これにより、子どもたち自身が活動参加の意欲を高め、地域での活動が居場所となっていくと考えます。

地域における子どもの居場所づくりとして、二つ目には子ども食堂があげられます。子ども食堂の始まりは、2012年に東京都大田区で「気まぐれ八百屋だんだん」を運営する近藤博子氏が知り合いの小学校副校長から「うちの学校に『給食以外はバナナ一本』という子どもがいる」ことを聞き、同様の子はいるかもしれないと思って始めたのが始まりとされています。その後、子ども食堂は全国的に増加し、2021年12月時点で約6,000カ所となっています。湯浅（2019）は、こども食堂は当初から「地域交流拠点」と「子どもの貧困対策」の2本足で立ち、その立脚点は最初期から今に至るまで変

わっていないとしています。そして、子ども食堂を「子どもが一人でも安心して来られる無料または低額の食堂」としています。

「NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ」による第1回全国子ども食堂実態調査集計結果(2022年1月31日)を見てみますと、主な目的は「子どもの食事提供」が88.4%、「子どもの居場所づくり」が83.7%で上位となっています。また、実施している地域づくり活動について、最も多いのが「多世代交流を促す取り組み」(66.8%)、「食品ロス削減を進める取り組み」(43.7%)、「大学生等の地域の若者の参加を促す取り組み」(32.5%)、その他「ボランティア活動」、「国際交流」、「清掃活動」、「地域のお祭りの実施」等でした。子ども食堂に参加するのは子どもたち(乳児や小学生、中学生、高校生)だけではなく、大人や高齢者も参加しています。また、子どもたちの中には障がいをもつ子どもや経済的に困窮している子ども、虐待・暴力を受けている子ども、性的マイノリティの子ども、孤立している子ども、外国にルーツのある子どもも参加しています。このように、子ども食堂は子どもの社会化形成の視点から捉えた場合でも縦と横の社会化形成の機会を提供する場所のみならず、異世代、多様性を尊重した地域交流の場となっています。そのため、子ども食堂のさらなる推進と施策支援が期待されます。

以上、子どもの居場所づくりについて述べてきました。今日、ネット社会、コロナ禍を踏まえ、子どもの育つ環境を考えた場合、コロナウイルスへの感染防止に留意し、子どもの健全育成と社会化形成の視点から、子ども同士が集い、活動する機会が必要であり、その機会の場が「子どもの居場所づくり」です。そして、この活動の場は、子どもの主体的活動を重視し、安全・安心な家庭・学校・地域の生活圏で実施されることが望ましいといえます。子どもの居場所づくりでの活動を通して、子どもたちは良好な対人関係能力を育成し、幸福感や自己実現を高めていくことが期待されます。

<文献>

阿部彩・埋橋孝文・矢野裕俊(2014)「大阪子ども調査」結果の概要」

中嶋喜代子・廣出円・小長井明美(2007)「居場所」概念の検討 三重大学教育学部研究紀要第58巻 社会科学77-97頁.

七星純子(2019)「子ども食堂と「居場所」論」千葉大学大学院公共学府 研究プロジェクト報告書第345集13-28頁

三宅博之(2014)「論説 北九州市における子ども会活動の衰退とその課題 - 北九州市小倉南区子ども会調査を通して - 」北九州市立大学法制論集第41巻第2号

斎藤 史夫(2006)「子どもの「居場所づくり」の可能性と課題」早稲田大学大学院文学研究科紀要. 第1分冊52,121-129頁.

湯浅誠(2019)「こども食堂の過去・現在・未来 (特集「孤立と排除」に立ち向かう社会貢献活動)」地域福祉研究(47)14-29頁.

5．子供とインターネットの関わり方

小村 俊平（ベネッセ教育総合研究所 主席研究員／岡山大学 学長特別補佐）
研究員 宮 和樹

1．はじめに

近年わが国の児童・生徒を取り巻く環境は大きく変化した。2019年に開始されたGIGAスクール構想により、全国の小中学校の児童・生徒への1人1台端末と高速ネットワーク環境が整備された。日本の学校のICT利用は他国よりも遅れていると言われていたが、学校の授業や宿題を通じて子供たちがデジタル機器やインターネットを活用する機会が大幅に増えたのである。

また、世界的な新型コロナウイルス感染症の流行は、学校のICT利用を加速する要因となった。2020年の全国一斉休校の際には「学びを止めない」との合言葉のもと、全国各地でオンライン授業やオンラインでの学習管理が行われた。地域や学校によって差はあるものの、こうした取組の経験は2022年現在でもいかされており、日本全国のICT利用度を底上げした。子供たちにとっては、デジタル機器やインターネットが遊びの道具だけではなく、学びの道具としても認識されるようになったと言えるだろう。

このような状況下で実施された本調査では、10歳～15歳に対して自己肯定感や居場所感、困難から立ち直った経験など様々な項目を質問している。そこで本稿では、子供の自己肯定感やネットへの意識に着目し、その特徴を分析する。

2．高い自己肯定感と現状への満足

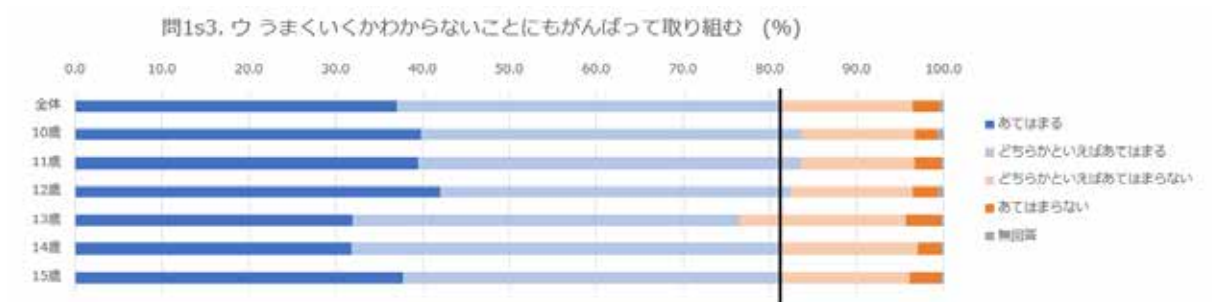
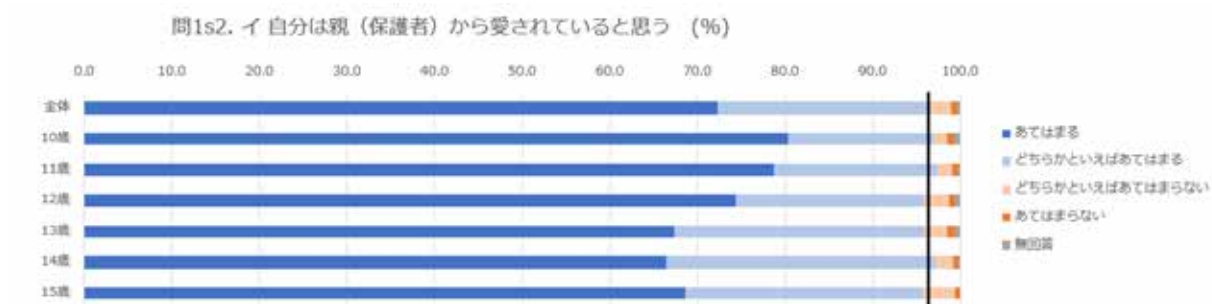
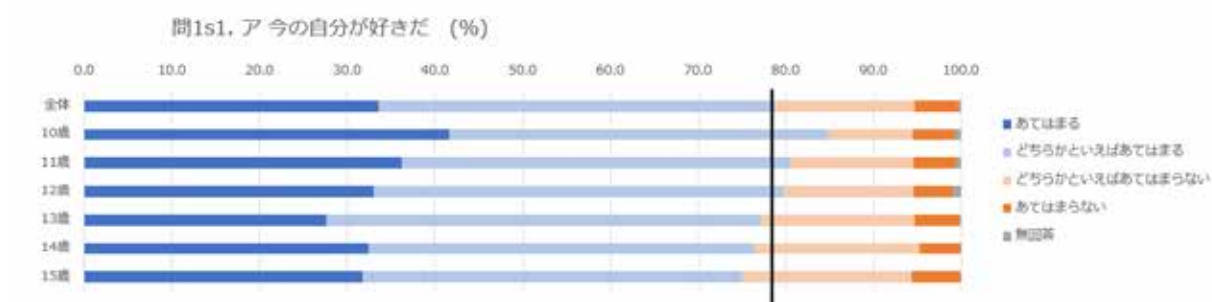
「今の自分が好きだ」「自分は親（保護者）から愛されていると思う」「うまくいくかわからないことにもがんばって取り組む」「自分は役に立たないと強く感じる」という質問への回答結果は次の4つのグラフのようになった。なお、それぞれのグラフにおいて、「全体」の結果の肯定的な回答（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と否定的な回答（「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」）の境界に黒い線を引き、全体の傾向と年齢別の傾向を比較しやすくしている。

「今の自分が好きだ」へ肯定的な回答をした割合は、全体で80%弱であり、年齢別にみると10歳でやや高く、以降年齢が上がるにつれて微減している。

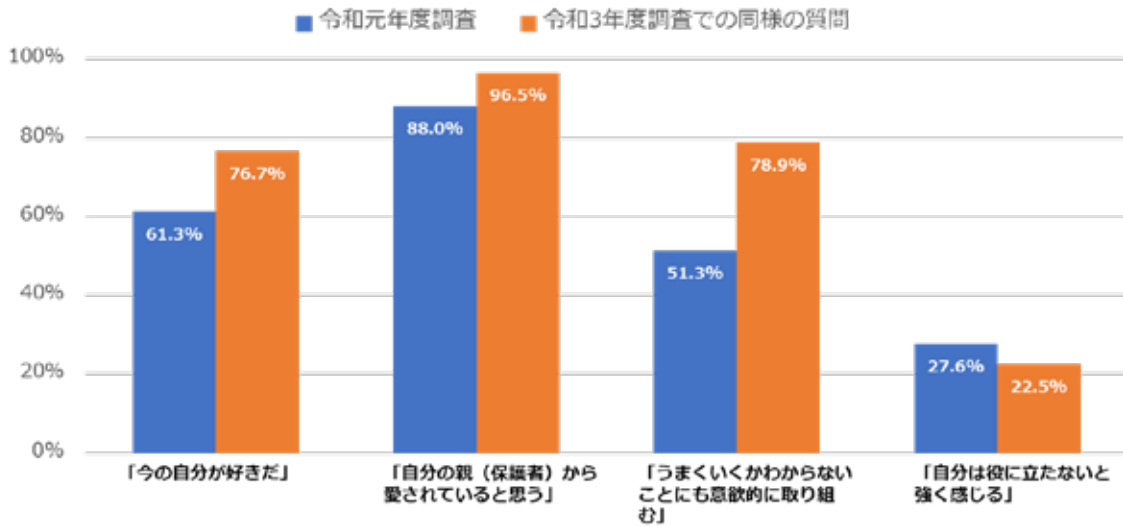
「自分は親（保護者）から愛されていると思う」については、年齢に関わらず95%強が肯定的な回答をしていた。

「うまくいくかわからないことにもがんばって取り組む」については、おおむね80%が肯定的な回答をしていたが、13歳のみ若干低い結果となっていた。

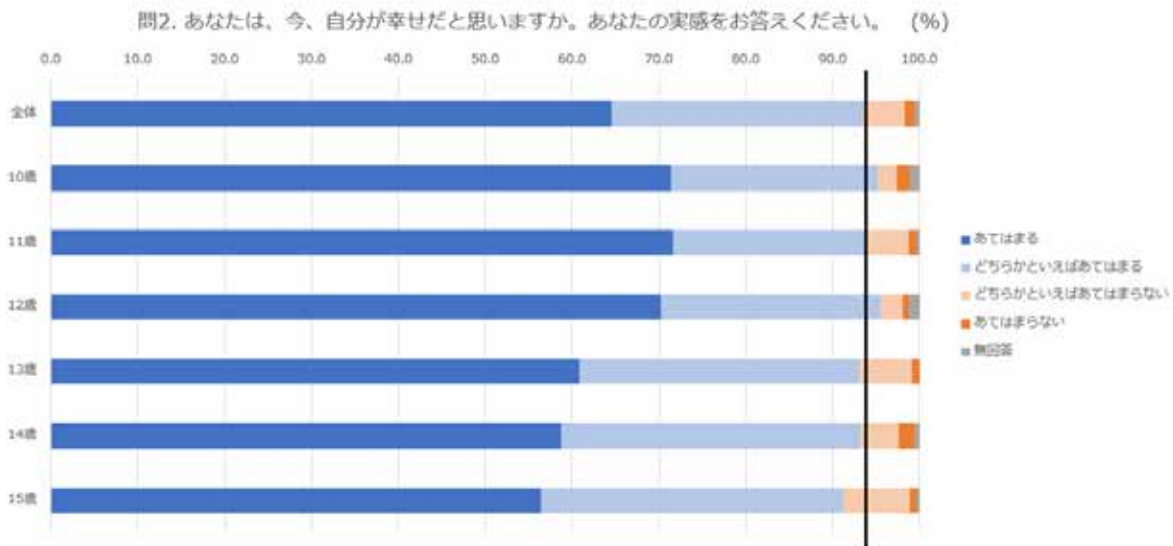
「自分は役に立たないと強く感じる」については、全体として20%強の子供が肯定的、すなわち自分が役に立たないと感じていると回答していた。



これら4問は令和元年度の「子供・若者の意識に関する調査」でも同様の質問がされている。両調査で各質問に肯定的な回答をした13～14歳の割合をまとめたのが次の図である。13歳～14歳という一部の年齢の比較に留まるが、いずれも今回の調査の方が、自己肯定感が高い結果となっている。



次に、「あなたは、今、自分が幸せだと思いますか。あなたの実感をお答えください。」という質問への回答結果は、次のようになった。年齢によらず 90%以上が肯定的な回答をしていた。



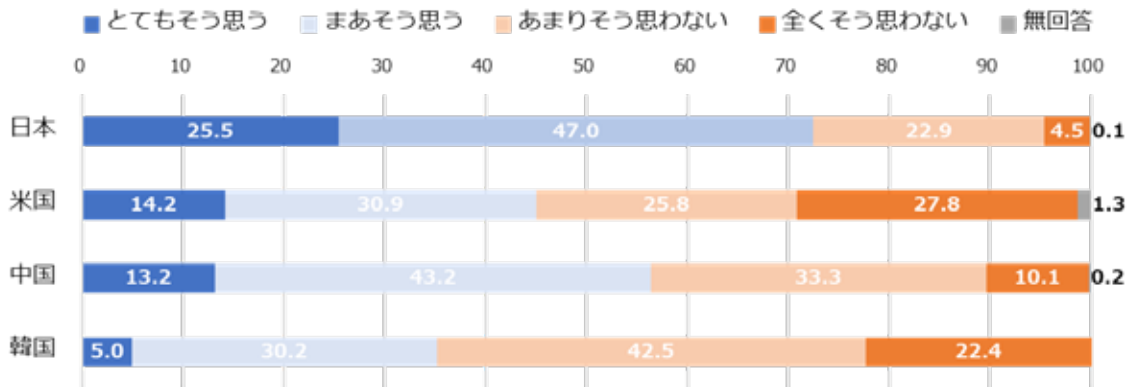
令和元年度の「子供・若者の意識に関する調査」では、「あなたは、今の生活が充実していると思いますか。あなたの実感をお答えください。」という質問があり、13～14歳は83.6%が肯定的な回答をしていた。質問項目が一致していないため厳密な比較はできないが、こちらも今回の結果の方が肯定的な傾向が強い結果となっている。

これらの結果から、本調査の調査対象となった子供は高い自己肯定感を持ち、現状への満足度も高いといえる。コロナ禍が始まり2年が経過し、多くの学校行事が中止になったり、また家庭での行楽等も行きづらくなったりしている現状で、これほど高い結果になったことは興味深い。

また、よく「日本の子供は海外と比べて自己肯定感が低い」と言われる。その際に引用されるのは日本財団による18歳を対象とした国際調査「国や社会に対する意識(2022年)」や、国立青少年教育振興機構による「高校生の生活と意識に関する調査(2015年)」である。また、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の質問紙調査では「自分には、よいところがあると思いますか」とたずねており、前出の高校生の調査と同じ2015年度でも、小学生は80%弱、中学生は70%弱が肯定的な回答を

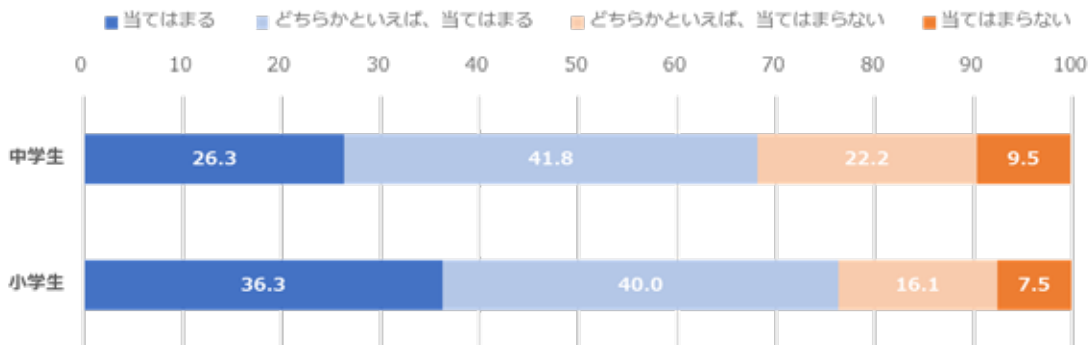
している。これらのことから、日本の子供の自己肯定感は「中学生までは高いが、高校生になると急激に低下する」と捉えるのが正しく、今回の調査でもその一側面が裏付けられたといえるだろう。この高校生以降の急激な低下の要因等を調査することが、今後望まれる。

「自分はダメな人間だと思ふことがある」



出典：国立青少年教育振興機構「高校生の生活と意識に関する調査報告書-日本・米国・中国・韓国の比較-」2015年

「自分には、よいところがあると思いますか」



出典：文部科学省「全国学力・学習状況調査」、児童生徒調査の結果（2015年）

3. 居場所感

「次の場所は、今のあなたにとって居場所になっていますか。」という質問（には「自分の部屋」「家庭」「学校」「地域」「インターネット空間」が入る）への年齢別回答は、以下ようになった。

自分の部屋が居場所であると回答した子供（「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の合計）は、全体で約85%で、10歳、11歳でのみ80%を下回っていた。これはこの年齢ではまだ自室がない子供も多いためと思われる。実際、答えにくかった質問を選ぶ質問項目において、「自分の部屋がないから」という回答が複数見られた。

家庭が居場所であると回答した子供は90%強であった。「自分の部屋」と「家庭」への回答のうち「あてはまる」と回答した割合（グラフの濃い青色部分）に着目すると、「自分の部屋」を「あてはまる」と回答した割合は年齢が上がるにつれて増加しているのに対し、「家庭」を「あてはまる」と回答した割合は年齢が上がるにつれて減少している。年齢の上昇に伴い、家庭全体から自分の部屋を自分

の居場所だとより強く認識するように変化していることがうかがえる。

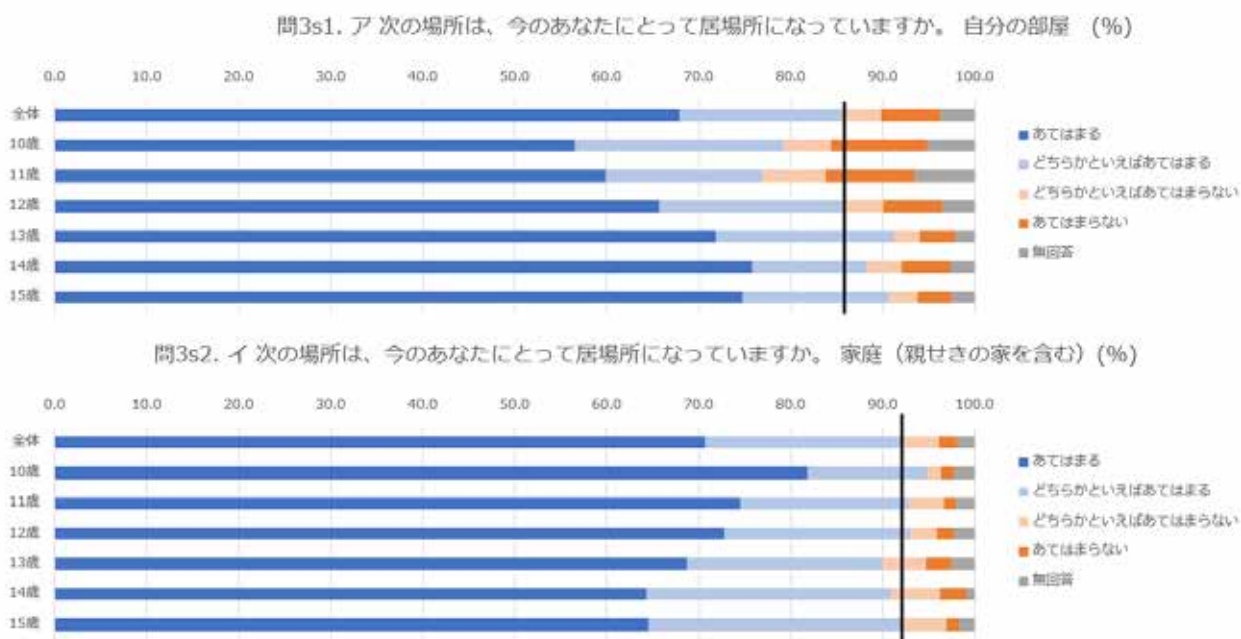
学校が居場所であると回答した子供は、全体で75%強であった。13歳でのみやや低い傾向がみられるが、これは中学校へ進学した最初の年であり、新しい学校環境に十分なじめていないためと思われる。

地域が居場所であると回答した子供は、全体で65%強であり、10歳のみ約75%と高い傾向を示している。

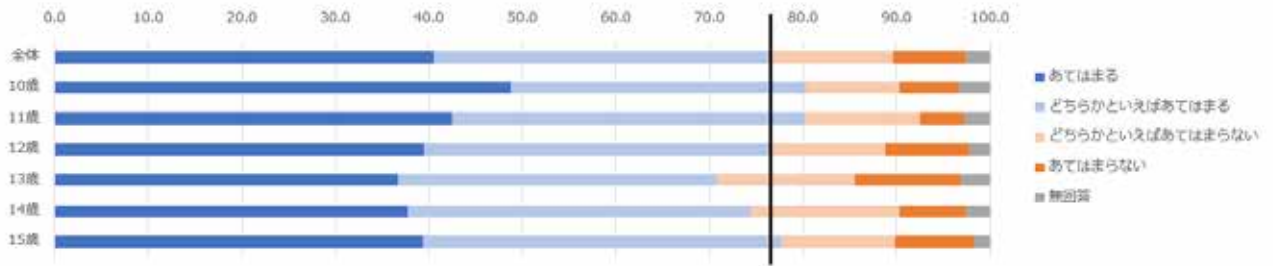
インターネット空間が居場所であると回答した子供は全体で70%弱であり、おおむね年齢が上がるとつれて肯定的な回答が増加している。

なお、本調査の項目に含まれていないが、数多くの児童・生徒と接してきた筆者らの経験をふまえると子供たちのインターネット利用法の多くは、学校等のリアルな友人との交流や動画・音楽等のコンテンツの閲覧であると推察される。実際、内閣府の「青少年のインターネット利用環境実態調査（2020年）」では、10歳～12歳ではインターネットの利用内容はゲーム、動画視聴、勉強の順に多いが、13歳～15歳ではそれらに加えてコミュニケーションと音楽視聴が大きく増加している。本調査の対象である10歳～15歳のうち、特に小学生である10歳～12歳は、インターネットで知り合い、インターネット上でしか交流していない人間関係は少なく、その結果インターネットが居場所だと感じられるケースが少ないと考えられる。

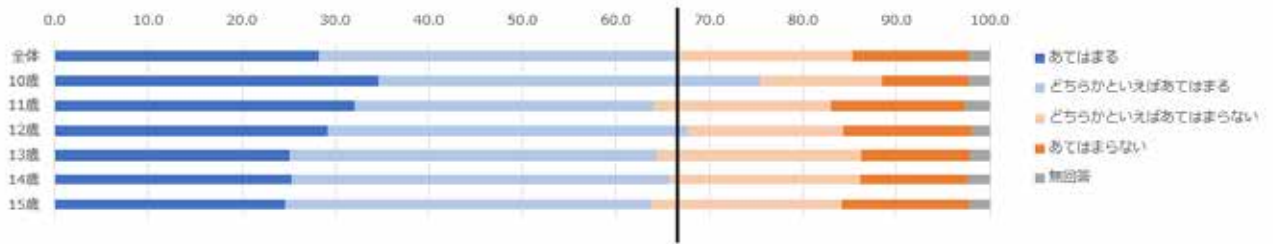
また、子供たちが小学生のうちには家庭の共有端末や保護者が管理する端末でネットを利用し、中学生以降になって個人で自由に使える端末を買い与えられることが多いと思われる。そのため、中学生以降でコミュニケーションの割合が大きく増加するのであろう。今後、GIGAスクール構想により小学生にも個人端末によるネット利用が増加すると、ネットでコミュニケーションをする小学生の割合も増えることが想定される。それに合わせて、より早い段階で情報モラル教育等に取り組んでいく必要があるだろう。



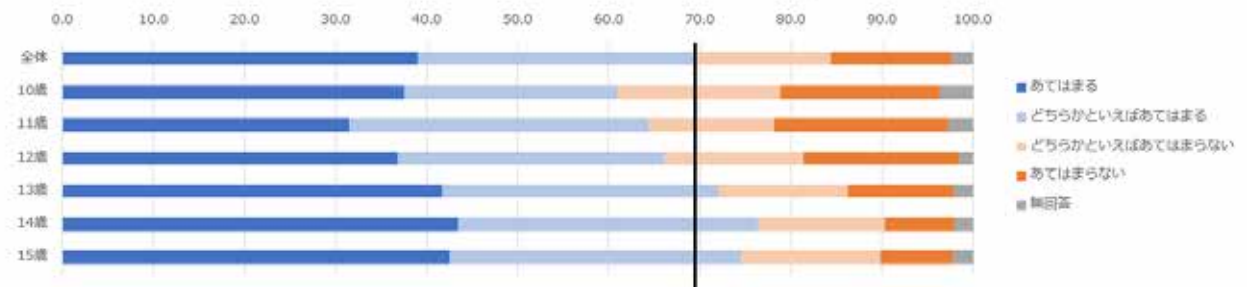
問3s3. ウ 次の場所は、今のあなたにとって居場所になっていますか。学校(%)



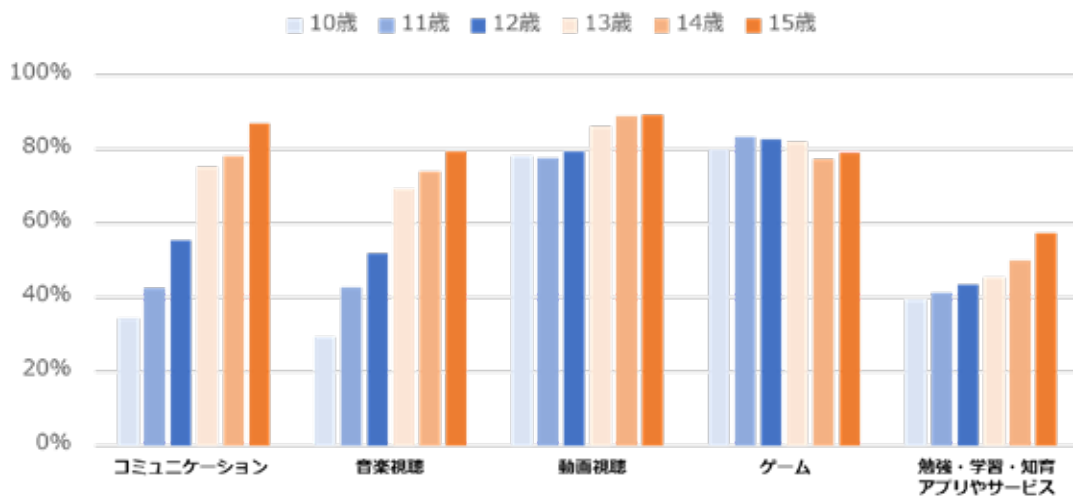
問3s4. エ 次の場所は、今のあなたにとって居場所になっていますか。地域（図書館や公民館や公園など、現在住んでいる周辺やそこにある建物など）(%)



問3s5. オ 次の場所は、今のあなたにとって居場所になっていますか。インターネット空間（SNS、YouTubeやオンラインゲームなど）(%)



インターネット利用内容



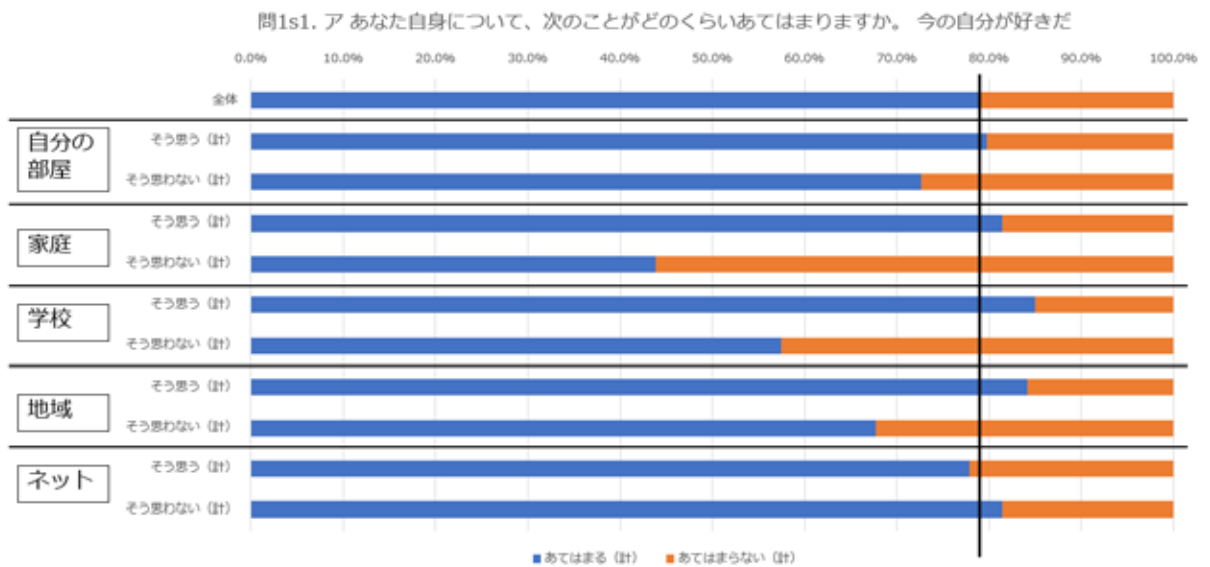
出典：内閣府「青少年のインターネット利用環境実態調査」2020年

次に、自己肯定感に関する質問をこの居場所感に関する質問への回答別に見てみる。

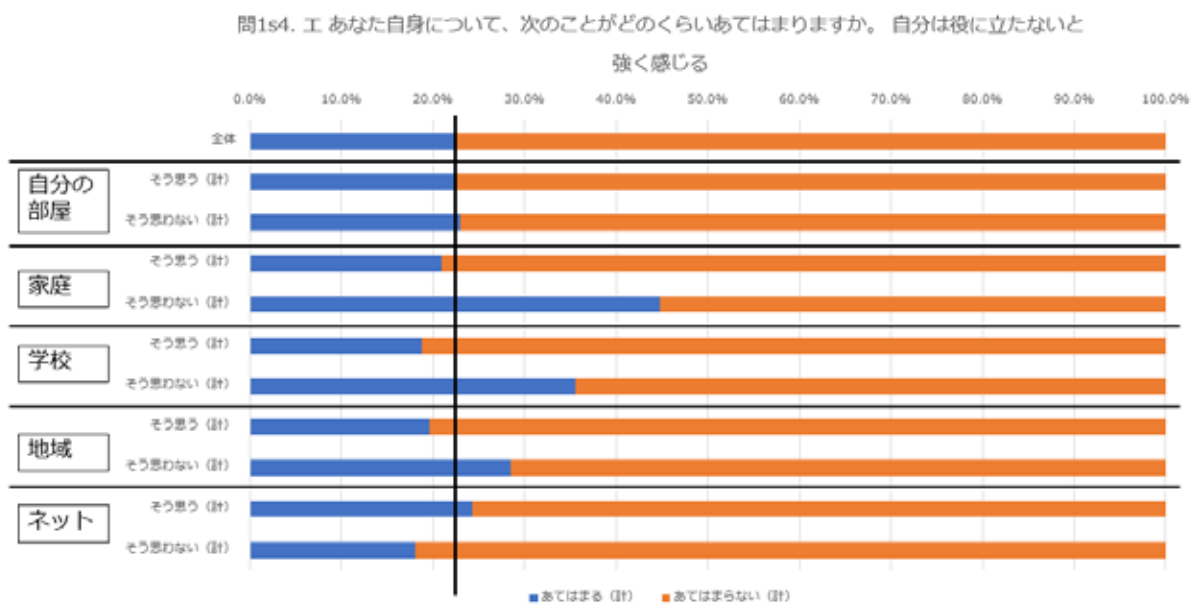
「家庭」と「学校」、「地域」が居場所になっていないと回答した子供は、「あなた自身について、次のことがどのくらいあてはまりますか。『今の自分が好きだ』」「あなたは、今、自分が幸せだと思いますか。あなたの実感をお答えください。」に対して肯定的な回答をした割合が低くなっていた。また、「あなた自身について、次のことがどのくらいあてはまりますか。『自分は役に立たないと強く感じる』」に対して肯定的な回答をした(自分が役に立たないと感じている)割合が高くなっていた。

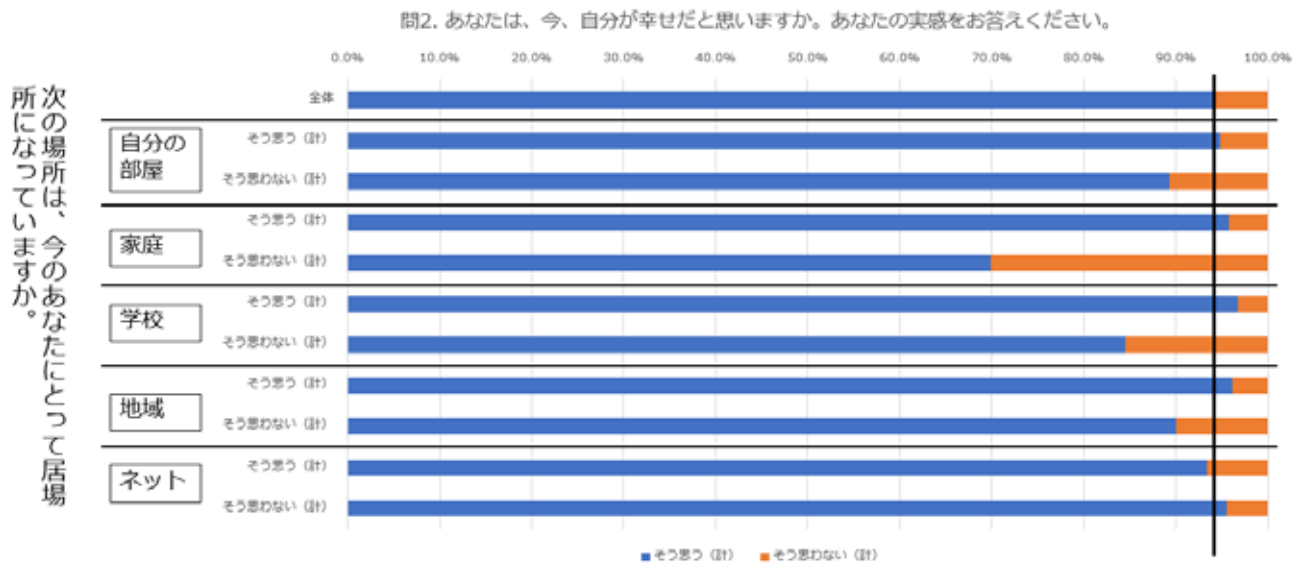
一方で「自分の部屋」と「インターネット」の居場所感の有無は、これらの質問への回答に差異が見られなかった。家庭や学校、地域といった物理的に近い人々とうまく関係性を構築できていない子供にとって、インターネットは自分の部屋のような安心感をもたらすものであり、結果としてこれらの質問への回答に差異がない結果となったのかもしれない。

次の場所
は、今の
あなたに
とって居
場所
になって
いますか。



次の場所
は、今の
あなたに
とって居
場所
になって
いますか。





次の場所では、今あなたにとって居場所になっていますか。

4. おわりに

本稿では、10歳～15歳の子どもの自己肯定感やネットへの意識に着目し、分析してきた。最後に今後さらなる調査を期待することとして、以下の二点を挙げたい。

第一に、なぜ高校生になると自己肯定感が低下するのか。本調査によって、日本の子供は海外と比べて自己肯定感が低いわけではなく、中学生までは高いが、高校生になると急激に低下する可能性が見えてきた。その背景には、発達段階による意識の違いや、高校に進学してからはより広い世界を目にすることになり相対的に自己評価が下がることなど、幾つかの仮説が考えられる。定量・定性両面からの調査を期待したい。

第二に、小学生で個人の端末利用が進むことで居場所意識がどのように変わるか。今回の調査の自由記述からは、小学生がネット上で交流するのはクラスメイトなどリアルでの知り合いが大半であったことがうかがえた。GIGAスクール構想で配布された端末を含め、今後小学生も個人で利用する端末を持つ割合が増えることが予測される。そのとき、リアルの知り合いでない人とネット上で交流するようになるか、その場合、ネットに対する居場所意識や考え方にどのような変化が現れるか、継続的な調査を期待したい。また、このような変化が起きた場合に、学校でデジタル・シチズンシップ教育にどのように取り組んでいくかを合わせて検討する必要があるだろう。

